

竹豊二座衰滅

ども、竹本座の沈退は、一步一步遠淺より沖の深みに向ひ行きぬ。一たびは衰運を妹脊山に翻したりと雖も、今や日に下り行く老の坂、死滅漸く近からんとして、天明六年十月彦山権現誓助劔に息ふき返したれど、人氣は漸く他に向はんとせり。根すでに腐りたる老木の末は、遂次に倒朽すべきのみ。寛政、享和以來最早殊更に竹本座と稱すべきものなきに至りぬ。豊竹座と合し、かの北堀江座に加はり、分合集散の規なく、毎興行は必ず異なる座本を出し、太夫もそれと定まれる人の出勤するにあらず。今は竹本座も沖の深みに沈み果てぬ。

豊竹座は、北堀江座ありて其傳統を維持すれども、宗家は明和の初年よりして起伏常なく、朝に興りて夕に倒るゝ

の状を呈し、其興行中吾人が記臆すべき價あるものは、僅かに安永元年の艶容女舞衣の一あるのみ。

明和、安永以來竹豊二座の衰退此の如し、畢竟するに、積年全く同一の模型に則り、太夫も前人に比しては力量乏しく、人形にも文三郎の如き名手なく、其の意氣込の薄き處よりして、漸次に世の嫌厭を招き、遂に退滅したりし而已。前にも屢記したるが如く、元來人形は靈性を有するものにあらざれば、之れを遣ふもの如何に巧なりとも、俳優の技に及び難きや論なし。太夫とても亦然り。如何に音節に秀妙なりとても、到底老幼男女幾多の人物を區分して、悉く是等に情をこめんこと、俳優の一人が一人を代表するに及ぶものならんや。唯我國の操が、百有餘年の間其興行



を絶たざりしものは、貞享、元祿の昔に巢林子義太夫ありてよく其基礎を定め模範を後代に垂れ、後代は又之れに則りて世と推移したりしによるのみ。

京都の明和安永當時は、其詳を知るに由なしといへども、京都の竹本座は多く大阪の古淨瑠璃を語り、或は大阪と交替して其生命を維持し、時に歌舞伎狂言にならひて淨瑠璃を綴り、之れを興行したりしに止まりしならむ。

夫れ操が歌舞伎をして則らしめし間こそ、其生命は確かなりけれ。既に歌舞伎にならふ事繁きに至りては、其生命危きものと見爲さざるを得ず。京阪文化年中の状態は實にかゝる有様にして、寸進尺退を事とせり。然れども、時に意外の大當りをとり、再三再四、反覆興行せられて彼の全

操漸衰期  
貞享、元祿の昔に巢林子義太夫ありてよく其基礎を定め模範を後代に垂れ、後代は又之れに則りて世と推移したりしによるのみ。

盛時代有数の作と肩を比すべきものもなきにあらず。寛政年間の蝶花形名歌嶋臺、加々見山廓寫本、繪本大功記又は享和年間箱根靈驗覽仇討、文化の會稽宮城野錦繡、八陣守護城の如きこれなり。文化十三年の五天竺又當時の作としては稱すべきものなりといふ。かくて新作淨瑠璃は殆んど文化年間を限りとし、文政に入りては極めて稀なりしものゝ如し。よしありとても、正本として世に弘め、世は又之れを傳ふる程のものにはあらずなり。天保年間に入りて馬琴の八犬傳によりて作れる花魁蒼八房契情小倉色紙等一二なきにあらずといへども、甚だ少なく、嘉永年中、生寫朝顔日記の出でたる外には絶えて吾人の列擧するに足るものあらずなり。



浄瑠璃の新作文化に絶

歌舞伎に行はれたるを浄瑠璃になほしたるには、宿無團七時雨傘、金門五三桐、伊勢音頭戀寐双等の數種あれども何れも文政以前のものゝ如し。されば浄瑠璃の新作は文化年間に絶えたりといはんも不可なかるべし。終りに臨みて、言狂作書に、小説稗史の作風を真とすれば、浄瑠璃は行にして、狂言は草なりと分ちたる處に、聞くべき言あり。浄瑠璃の部のみを載す。

浄瑠璃の作を行と云ふ事

行の位に表したる浄瑠璃は、又小説、稗史と事かはり、年號、人名、國所等にては左迄ごく糺さずともよく、昔、古流、井上播磨、山本土佐、岡本文彌、宇治加賀、道具屋吉左、立門、表具又四郎の頃は、扱も其のちどの

かゝりにて、文段もさらくとして、道具立もなく、木偶もなく、謡曲の如く三段計りに綴り、所々に節を付しのみにて、外題とても俵藤太、中將姫、蟬丸など、付院本に残りしも、謡本の如し。乃ち延寶貞享の頃、當流竹本、筑後掾、當流豊竹、越前少掾より追々に開け、豊竹を東、竹本を西ととなへ、竹本には近松門左衛門、豊竹には西澤一風とて、作名をあらはす事とはなりぬ。最も五段續とて狂言を作るには、其折々の太夫の音聲咽喉を辨へ、木偶をつかわせ、よく世界を立て、趣向をまうけ、文段を綴り、満尾して印行し、丸本として後代に残すにも、手爾遠波、假名遣ひをどがめず、たとひあて字なりとも、早く俗に聞え易きを専らとして、節に



耳を樂ましめ、木偶に目を喜ばするをよしとすれば、近松が國性爺、反魂香、西澤が時頼記、万石通と東西の當り狂言にして、其頃名を噪うせり。其後、竹田出雲、三好松洛、並木宗輔、近松半二等出で、淨瑠璃の脚色段々巧になり、一通の作にては、聞官看官も承知せぬ事になり、譬へば作者三人あれば、塲割とて建作者より誰は二の切、彼は序切、誰それは四の切と二の口、我は三段目を書くなど、一場くを割付合作する様になり行、ふし付等も、大落し表具など三の切よりつかふ事ならずと、法則を極めて作する事とはなりける也。是より銘々文段を上げみ、書籍を見たる力を顯はさんとして、或は戀女房の沓掛村に、金石皆鳴る秋の夜

のと秋風の辭をつかへば、源平躑躅の扇屋には、青葉の笛の音を恨むが如く慕ふが如く愁ふが如くと赤壁賦をきかせ、薄雪の腹切には、虎溪の三笑をつかへば、姫小松の岩幅に漁父の辭を聞かする如く、是等は文章を自由につかひまわして世話物、所謂お染久松お千代半兵衛の類ひ、心中情死の狂言にして、其頃の人情流行の詞をうがち、よく其實説を知りながら、世俗にはやく聞せんが爲め人名居所を引直すこと、譬は、小野道風、青柳硯に、轉法輪所を道風に書かする故、文盲人は四天王寺の額を見れば道風の筆なりと思ひ、軍法富士見西行を見ては、此春ばかり墨染に咲けど詠しは西行なりと思ふ人も多からむ。ましてや、



忠臣藏の壺屋判官、高師直も、太平記の世界と混じ、近江源氏の佐々木高綱、北條時政は辛崎坂本邊にて戦ひせしものと思ふものあらむ。此淨瑠璃の作者も、寛政の中頃迄は、日々新に狂言も著し、が其後は只古き當り淨瑠璃を幾度もかへす事にて、新作は稀々にて、邂逅新外題を付れども、所謂焼直にして二番煎の茶と同じく味ひなし。太夫木偶、三粒共追々故人と成行に随ひ、おのづと此道の作者もなく衰へし物歟。此内一二の誤謬なきにあらざれども、作り方を語る處、又注意すべき價を存す。

第二節 江戸の概況

京阪の漸衰期上半は、寧ろ江戸盛時なりき。蓋し義太夫節

淨瑠璃の作者漸く江戸に出づ

を以て、操興行をなす事いたく時を後にし、京阪地方に厭はるゝ頃は、江戸に歡待せらるゝ時なりき。これによりて、京阪地方の名ある太夫は其地を棄て、江戸に下り、平賀源内等また筆を執りて淨瑠璃界掉尾の大作を出すに及びては、明和安永以後江戸の盛んなる事、遙かに大坂を凌げり。

江戸に義太夫節の操座を創設したるは、豊竹肥前椽なることは、既に先に述べたるが如し。伊勢太夫を経て豊竹東治座本となりぬ。此肥前座は多くは太夫を大阪より聘し、大阪の淨瑠璃を其儘興行したるもの多しといへども、明和頃より漸く江戸にも作者を出すに至れり。明和三年に興行せる、和泉式部軒塲梅の如きは、作者明かならざれど



外記座

も大入なりきといふ。同六年には蝦夷錦振袖雛形興行せらる。此頃吉田冠子江戸に下りて肥前座にあり、玉泉堂及び吉田二一と共に作せるものこれなり。次ぎて時代世話女節用を出せり。當時又別に外記座あり、座本を豊竹新太夫といふ、また大阪の人なり。肥前座と互に盛を競ふ。外記座は彼の薩摩外記が操を興行したる座にして、寶曆の頃より土佐節と共に世にすたりて、遂に席を譲りたるなり、一に薩摩座とも稱す。土佐の座も、明和元年、大阪の竹本座一連、紋太夫、土佐太夫、綱太夫等の姫小松子の日遊を興行せし時には、百有余日群衆木戸に充ちて、江戸未曾有の繁盛なりきといふ。豊後の末流は到る處に迎へられて、江戸の諸流は忘れら

神靈矢口渡

れ、操も亦義太夫節の専有に販するに至りぬ。薩摩座、明和七年正月を以て福内鬼外の作神靈矢口渡を興行するや、其大入大當は京阪の沈衰に反して非常の盛況を呈せり。此頃吉田冠子此座にありて人形を操り、其勢ひ比ぶものなし。當時大阪の竹本座は萎靡振はずして冠子を招き、冠子が満身の得意を擔ふて歸阪したる事も既に説きぬ。

福内鬼外

肥前座は、全年往古摸様龜山染、源氏大草紙等を興行す。前者は玉泉堂吉田二一等の作る處にして、後者は鬼外の作なり。福内鬼外は、平賀源内の戲名なり。源内がはじめて淨瑠璃の作に筆を染めたるは、彼の矢口渡に生まれり。しかも此



三井元之助

人の第一の傑作と稱せられ、間もなく歌舞伎に入りて、今なほ反覆せらる。此作はもと有名なる富豪、三井元之助の誂へによりて物したるものにして、元之助は深く吉田冠子を愛し、冠子を介して源内に筆を執らしめたるものなりといふ。元之助后紀上太郎と稱して、己も筆を執りて淨瑠璃の作をなせり。

明和八年、鬼外、弓勢智勇湊を出し、玉泉堂等肥前座の爲めに關取一鳥居を作せり。安永に入りては二年鬼外又肥前座の爲めに嫩榕葉相生源氏を作し、三年吉田専藏座の爲めに前太平記古跡鑑を作り、四年忠臣いろは實記をもつて比年其作絶えず。

松貫四

彼の伽羅先代萩の作を以て名ある松貫四、又安永三年始

千品龜井

めて鐳鉢駄六一代噺に筆を執り、四年吉田仲二と共に吉野靜人目千本を作れり。貫四は通稱を萬屋吉右衛門といふ、葺屋町の人なり。如此、作者輩出するに際して、千品龜井もまた筆を外記座の爲めにとりて、鎌倉山縁翠勝鬨を作りぬ。龜井文才ありて、當時の吉原細見序、芝居評判記の類、此人の筆になりたるもの多しといふ。

戀娘昔八丈

江戸既に鬼外貫四を出し、龜井も加はりたるに、吉田角丸も起ちて貫四と共に戀娘昔八丈を外記座の爲に合作せり。これ有名なる白子屋事件にして、安永四年九月廿五日を以て初日とせり。次ぎて紀上太郎も出でて外記座の爲めに志賀の敵討及び糸櫻本町育を作れり。安永八年に及



結城座

べば、鬼外又其門人森羅萬象等と共に、先の矢口渡の後日物語として荒御靈新田神徳を結城座の爲めに出せり。結城座は、先の説教座結城孫三郎の座なり。享保の頃より世に棄てられて、遂にこれも亦義太夫に奪はれたるなり。間もなく鬼外は歿したりと雖も、紀上太郎松貫四なほ存して肥前座の爲めに筆を執り、達田辨二、鬼眼等ありて彼の伊達競御國歌舞伎を出せり。實に天明年間の大坂表は、到底江戸の盛んなるに比すべくもあらざりき。彼の容揚ノ黨が加賀見山舊錦繪も天明二年に出でたるものなりき。レ五年には松貫四等の手に伽羅先代萩成りて結城座に興行せられ、七年には紀上太郎容揚黨馬馬等の間に碁太平レ記白石噺は出でたり。芝屋芝叟、若竹笛躬、梅野下風等あり

江戸の天明年間

伽羅先代萩

寛政以後

て、僅かに前代の跡を追ふに止る大坂に比しては、太く其勢を異にするを見る。されど寛政以後、享和、文化の頃、鬼外、上太郎等の門人に、筆を執るものありきといへども、漸次に衰退して、たゞ寛政の初年に花上野譽の石碑の傳ふべきあるのみ。曲亭馬琴、十返舎一九等に一二の讀本淨瑠璃は作られたれど、其類の少なきを珍とするに止れり。歌舞伎の盛んなる堺、葺屋の二町に介立して盛を争ひたるも、又暫時の事なりけり。右に述べたるものは淨瑠璃の新作につきてのみなり。太夫の如き、人形遣の如きには、及ぼさざりき。人形は吉田冠子去りて後、何人のよく其後を補ひしか其消息を詳にせずと雖も、安永十年の義太夫評判記は、當時の太夫を品評

江戸安永當時の太夫



して吾人に傳ふるものあり。先づ外記座に豊竹紋太夫、全住太夫ありて名聲最も高く、肥前座に豊竹氏太夫、全筆太夫等ありて之れに次ぎ、三粒には鶴澤喜八、野澤富八の外記座にあるあり、野澤蟻鳳、全庄次郎の肥前座にあるありて互に其技を角す。安永以後の諸太夫は、多く大阪の豊竹座より下れり。されば豊竹座は跡を大阪にひそめて、聲を江戸に掲げたるものと謂つべし。

文政以後、淨瑠璃に新作なく、操は日に衰へ歌舞伎の日に増して盛大に赴きしは、三津悉く然り。これ操りの去りて、歌舞伎の行はるべき自然の勢なりしか。

遠く顧れば、井上、宇治等諸流の長をとりて義太夫の大成したりしより以來、凡百年、貞享の始め竹本座の設立せら

義太夫節は  
操と離れて  
も其勢を挫  
かず

れてより、分れて豊竹座となり、更に北堀江座となり、江戸の諸座を犯して東治の座となり、新太夫の座となり、天下の首都繁華の津を占領して、其流風の擴布せし事、義太夫節は遠く幾多の諸流に超絶せり。操興行は逐次にすたれたりと雖も、素語り盛んにして更に其勢を挫かず。安永以後其節は訛謬にむかひ殊に婦女子に語らるゝに至りては愈亂れたる事、安永六年の淨瑠璃稽古風流を見ても明かなれど、彼の外記、土佐の如く操と離るれば忽ち世に忘れられんとするが如きものにはあらざりしなり。一言すれば、極めて世に合ひたる樂風なりき。蓋し義太夫、始めによく其根を固め、後繼者亦よく之れに習ひて世に弘布し、浸潤年久しきに亘りては、聽く人もまた其妙を味ふにな



れ、かくて世に絶えせざりしなりけり。操の漸衰期は、決して義太夫義の漸衰期にはあらざりしなり。次に操と歌舞伎との關係を一言して、義太夫節以前の消長を明かにせんとす。

第三節 操と歌舞伎との關係

操は我國の特技なりといふ。慶長以來こゝに三百年、延享寛延を其最盛時として、爾後頻りに衰退せりと雖も、明治の今日もなほ大坂に興行せらる。

歌舞伎の起るや、操と其時を同じうしきと雖も、屬禁令に按して頓挫したることもありしに、操には名手名筆相嗣ぎて、絶えず進歩し來りしは前に述べたるが如し。彼の巢林子が一度狂言作者として筆を執りたることもありし

操の歌舞伎  
の先に進  
歩したる  
由に理

に、浪花に下りて専ら淨瑠璃の作を爲すに至りしは、實に天の操に與して歌舞伎を棄てたりとも謂つべし。巢林子の天才と用意とは、既に前章に詳述したるが如し。元祿の時、歌舞伎界名優に乏しかりしにはあらず、狂言作者に秀でたる人を得ざりしなり。脚本は未だ俳優の覺書たるに止まりし時に際して、操には作者其人を得て結構宜しきにかなひ、語り手にも亦其人ありて妙音を弄し、加ふるに辰松、吉田等人形に長じたる人早くに輩出して巧に其技を演じ、歌舞伎は其模範をこゝに求めたる事も、亦處々に記述したる處なり。然れども、操も亦歌舞伎にならひて構へたるものなきにあらず。後編の年表に於て對照せば、其交錯の一端を窺ふに足るべし。今此處に説かんとするは、



淨瑠璃の作  
者多方面よ  
り来る

如何なる淨瑠璃の作が、歌舞伎に入りしかを記すに止めんとす、  
歌舞伎いまだ津打治兵衛を得ず、正三、五瓶等を得ざるに際し、操界先の近松、海音、出雲に次ぎて、蛙文、宗輔、千四あり、後には半二、松洛、一鳥等あり、各前代に鑑みて筆をとることゝなるや、後年合作の風、茲に起りて、統一の致に乏しきものを出すに至りきといへども、變化の妙を極めてよく登場に適せしめたるもの、巢林子よりは出雲に、出雲よりは半二の頃に於て進歩せり。此間、筋立頓作の高才としては文耕堂あり、人形に長じて筆に堪えたるものには吉田冠子若竹、笛躬あり、三絃の名手にして作に與れるには近松東南あり、太夫にしては梁塵軒、春草堂あり、謳の名人た

竹田出雲等  
の作最も多  
く歌舞伎に  
入る

りしものには淺田一鳥あり、芝居の座本たりしには竹田出雲あり、豊竹應律あり、並木丈輔、容揚、黛の醫、松田ばくの俳人、門左、海音、千四、松洛の一たび僧たりし事等を擧ぐれば、いかに作者が幾多の方面より集り來りて、其作も單調に陥らず、多方の趣味をこむるを得るに至りしかを知るべし。巢林子、海音の時、合作いまだ起らざりきといへども、出雲、一風、文耕堂等に始りてより以來、甚しきは八人の筆にさへ作せられき。故に各持場にや、まを仕組みて目先きを替へ、漸次に歌舞伎に接近せり。淨瑠璃の作にして歌舞伎の興行に上りたるもの、出雲等の作に最も多しと稱せらるゝも、畢竟するに、歌舞伎は絶えず其仕組みを操に求め、操も亦其技の進むと共に、歌舞伎に近づき、出雲等殊に



其脚色に妙を得たりしによるべし。試みに其有名なるものを擧ぐれば、大塔宮、磯鎧、大友真鳥、加賀國、篠原合戦、男作五雁金、蘆屋道満、大内鑑、楠昔、嘶、凱陣、紅葉をはしめとし、手習鑑、千本櫻、忠臣藏はいはずもあれ、源平布引瀧、小野道風、青柳硯の類數ふるに違なし。是等は何れも享保、元文以降、延享、寶曆の盛時に成りたるものなれども、元祿の昔、初代音羽次郎三郎をして、操は歌舞伎を真似て語り、人形も歌舞伎をまねて行ふ。然るに歌舞伎より操を學ぶ事、歌舞伎衰微の基なり。と慷慨せしめたるを見れば、又操の則を垂れたる事、元祿の當時よりして既に然りしを知るに足る。操も亦歌舞伎に倣ひしことも少なからざりしなり。されど、承應の昔、歌舞伎一變して狂言盡となり、寛文に續、狂言

はじまりてより以來、趣向を巧にし、新奇を争ひ、僅々四五十年間にして、正徳、享保の頃に至りては、中村少長、津打治兵衛等の作者出で、漸く見るべきの作出でざりしにはあらずといへども、元文、寶曆以來、五段續の新作、妙巧を極盡せる竹豊二座の曲を移して、其態を演じ、以て看客を招くに至り、操狂言世話、狂言と區別して、其名稱を附せりといふ。以て、操が如何に歌舞伎の源泉をなし、かを知るべきなり。

後篇の年表に於て、淨瑠璃の歌舞伎に入りて名ありしものは、其下に注し置きたれば、爰には細述せざるべし。寶曆の末年以降、操の衰運に向ひたる時の作といへども、年を追ひて、操と歌舞伎と其關係を密にし來りし、果、奥州安



達原といひ、本朝廿四孝といひ、忠臣講釋、道中双六、關取千兩、織妹、脊山、桂川、連理、柵、加々見山、繪本、太功記、箱根靈驗の類、何れも歌舞伎に入りてよく行はれ、反覆幾回となく興行せられて今日に及べり。されど、明和以降、歌舞伎界又作者を出し、治兵衛につぎて堀越二三治、金井三笑、櫻田治助等の筆を執りてよりは、只管操を眞似し、延享の當時とは勢を異にするに至りぬ。

歌舞伎より操に入りたるものにして有名なるは彼の海老藏が鳴神上人の久米仙人、吉野櫻となりて、豊竹座に現はれ、黒船狂言入りて、容競出入、湊となり、矢根五郎は潤色江戸紫に其譽を残したるが如きの類なり。又かの忠臣藏の條に説きたるが如く、彼我各其優れりしものに則れる

歌舞伎より  
操に入りたるもの

ものゝ如きは注意すべき事項にして、安永六年の伊賀越乗掛合羽(後近松半二作り替へて伊賀越道中双六といふ)天明元年の三日替を始めとし、近頃河原の達引、自來也物語の類、漸く其數を増加するに至りたれど、歌舞伎の操に做へるに比しては、其數甚だ少なし。さはれ先にも述べたるが如く、操にして歌舞伎に其範を求むるに至りしは、これ實に絶滅の域に迫れるを示すものなりけり。

操の日を追ひて衰微し、文化以降には再び昔日の榮華を期しがたきに至りしは、流行久しくして其演ずる處、單調に陥り、到底歌舞伎と軒をならべて人形の俳優に對する欠點を補ふ能はざりしに、基因するは、こゝに改めて説くを俟たずと雖も、文化より以來、歌舞伎が冲天の勢を得來



寛政以後江戸狂言の作風改まる

りし所以のものを考ふるに、並木宗輔の門より出でたる並木正三、大坂にありて明和安永の頃操と歌舞伎との作者を兼ね、並木五瓶其門より出で、寛政六年江戸に下り、單純なる江戸の作風を改めて理をこめたる京坂の風を移すや、江戸の歌舞伎も大坂の新作淨瑠璃を其儘演ずるの陋を學ばざるに至り、櫻田左交以來勃興し初めたる江戸の劇場は愈進歩して、今は又操をして之に倣はしむるに至り、かくて操は漸く其生命を失はんとするに至りしなりけり。

淨瑠璃の歌舞伎に入りたるもの

次に淨瑠璃の歌舞伎に入りたるもの、主なるものを年代に則りて列舉せん。

王代物 (公卿の事を文作せし物)

大塔宮囃鎧	享保八年作
蘆屋道滿大内鑑	享保十九年作
菅原傳授手習鑑	延享三年作
小野道風青柳硯	寶曆四年作
姫小松子の日遊	寶曆七年作
奥州安達原	寶曆十二年作
妹脊山婦女庭訓	明和八年作
大時代物	
國性爺合戦	正徳五年作
鎌倉三代記	享保三年作
信州川中島合戦	享保六年作
須磨都源平躑躅	享保十五年作



鬼一法眼三略卷	享保十六年作
壇浦兜軍記	享保十七年作
苜萱桑門築紫幞	享保二十年作
和田合戰女舞鶴	元文元年作
畝討襪襪錦	全
御所櫻堀川夜討	元文二年作
釜淵双級巴	全
平假名盛衰記	元文四年作
新薄雪物語	寛保元年作
軍法富士見西行	寛保二年作
楠昔晰	延享三年作
義經千本櫻	延享四年作

假名手本忠臣藏	寛延元年作
源平布引瀧	寛延二年作
戀女房染分手綱	寶曆元年作
一谷嫩軍記	全
義經腰越狀	寶曆四年作
義仲勳功記	寶曆六年作
祇園祭禮信仰記	寶曆七年作
岸姬松轡鑑	寶曆十二年作
孃景清八島日記	明和二年作
姻袖鏡	明和二年作
本朝二十四孝	明和三年作
太平記忠臣講釋	全



傾城阿波鳴門	明和五年作
近江源氏先陣館	明和六年作
攝州合邦辻	安永二年作
伽羅先代萩	天明五年作
碁太平記白石噺	天明七年作
木下蔭狹間合戰	寬政元年作
有職鎌倉山	寬政元年作
繪本大功記	寬政十一年作
時代物	
極彩色娘扇	寶曆十年作
由良湊千軒長者	寶曆十一年作
櫻御殿五十三驛	明和八年作

蝶花形名歌島臺	寬政五年作
加賀見山廓寫本	寬政八年作
箱根靈驗覽仇討	享和元年作
三十三間堂棟由來	未詳

古世話物

曾根崎心中	元祿十六年作
大經師昔曆	寶永三年作
心中二つ腹帶	享保七年作
心中宵庚申	全
茜染野中隱井	元文三年作
播州皿屋敷	元文五年作
夏祭浪花鑑	延享二年作



双蝶々曲輪日記 寛延二年作

八重霞浪花濱萩 全

關取千兩幟 明和四年作

染模様妹脊門松 全

伊達娘戀緋鹿子 安永二年作

戀娘昔八丈 安永四年作

桂川連理柵 安永五年作

新板歌祭文 安永九年作

第五章 諸流の起伏

寛永の昔、淨雲一たび樂場を江戸に開きしより以來、激越なる丹波少椽の流となり、或は清淡雅馴の土佐節となり

て、江戸節となり、江戸節より河東の流は生れ出で、諸流の粹を鐘め、江戸の花と稱せられたるは、先に陳述せり。此間幾多の流派并び行はれ、短命にして二代を得る能はざりし。近江節、若山節、式部、手品の諸流も既に前章に説き畢んぬ。

又源太夫の西上によりて基を拓きたる京都の、加賀節を出し、角太夫節を出し、角太夫節より一中となり、一中より豊後となり、豊後より常盤津となり、大坂の、播磨より義太夫となりて連綿其勢の猛なりしも、既に詳述せり。元文の始め、此等の諸流江戸に集まりて嗜好の衝突を來したるも、前に記せるところの如し。いでや、諸流の爾後如何に起伏生滅して今日に至りしかを觀察せん。



義太夫節最  
も操興行に  
適す

歌淨瑠璃

享保の初年義太夫節の侵入し來るや、東都の操座は對抗の勢を持し難く、土佐は其操を棄て、外記も其座を奪はるゝに至りし事、畢竟義太夫節の最も操に適したりしと、江戸に勝れたる淨瑠璃の作者なかりしとによれり。蓋し義太夫節は全くの語り物なれば、田夫野人、彼の米搗男の目、に一丁字なきものと雖も、聽けば其意を了すべけれども、歌淨瑠璃と稱せらるゝ、外記、一中、河東、豊後の流に至りては、聲の甲乙と、節の抑揚とを主とし、地の詞をも絃に合するを以て、聽く人を得ざれば其妙を認められんこと難く、到底義太夫と共に、操を興行して對等の勢を維持せんことは望むべきにあらざるなり。河東が操を棄て、歌舞伎の所作を助けたるは、其樂風を認めたるの自明ありしも

河東の出語

のと謂つべし。爾後其他の諸流も亦皆歌舞伎に入りぬ。初代河東は、享保年間屢、歌舞伎に出でたれど、出語りせし事はなかりきといふ。二代、三代以後、永年劇を助けたる事、後の年表によりて知らるべし。河東は流石に江戸諸流の長を兼ねたるを以て、俄かに豊後、義太夫等の爲めに其壘を奪はるゝことなく、當時の上流に行はれて、享和、文政の頃にありて、此節に通じざるものは、紳士と稱するを得ざりきといふ。彼の土佐節の如きは、雅なりとて、貴人の間に行はれ、此流の起りてより、婦女子も三絃を弄するに至りしものなりきと雖も、外記節と共に寶曆年間に廢りて、獨り豊後の諸流、義太の股引のみ行はるゝ事とはなりぬ。先の漸盛期以降、三都鼎立して各其華を競ひたる有様は、早



富本節

くに消滅して京坂の流風のみ、江戸を支配し僅かに河東の立つあるのみ。

宮古路豊後歿して常盤津を生じ、常盤津更に富本を生ぜり。富本の初代を富本豊前掾といふ。宮路文字太夫の門人にして、始めは品太夫と稱せり。師の常盤津と改むるや、共に改めて常盤津小文字太夫と呼べり。延享元年、富本節と改稱し、寛延二年鷹司關白によりて豊前掾を受領す。明和元年四十九歳にして歿せり。其師常盤津文字太夫なほ盛んにして、毎歳歌舞伎に出勤を絶たず。芝居の所作出語といへは、何時も常盤津文字太夫とて、男もよく、聲もよく、上手にて其狂言當らざるはなしとは、早く寶暦年間の賤の苧環が傳ふる處なり。文句も次第に高上にむかひ、素人に

初代富本豊前掾歿

初代常盤津文字太夫歿

二代富本豊前掾

もよく藝人を出し、旗本の間に行はれし當時の義太夫と共に、大に流行せり。初代文字太夫は、安永十年を以て歿せり。門人富本豊前掾に後るゝこと凡廿年なりき。

富本の初代は、かくの如く早死せりと雖も、其子午之助、富本豊志太夫と稱して其跡を嗣ぎ、明和三年、僅かに十三歳にして初舞臺を中村座にふめり。文化十四年十一月を以て、嵯峨御所より豊前掾と稱するを許さる。かの有名なる其倂淺間嶽は、この太夫の美音によりて富本の専有物となりしものなりき。文政五年六十九歳にして歿す。實に富本の流をして豊後三流の第一と稱せしめしことは、二代目豊前の力其多きに居り、二代目をして、よくこゝに至らしめたるものは、一に富本齋宮太夫の力なりといふ。



富本齋宮太夫

齋宮太夫は、初代豊前掾の門人なり、清水太兵衛と呼び、淨瑠璃を好みて諸流に涉れり。二代豊前の幼時を輔佐して、自らは齋宮太夫と稱せり。後豊前と不和を生じて、本姓清水に復す。老後剃髮して延壽齋と呼べり。享和二年七十三歳にして歿す。清元實に此門より出づ。

清元節

清元延壽齋、通稱を岡本吉五郎といふ。寛政六年を以て富本延壽齋の門に入り、齋宮太夫と稱して師の協を勤む。師の歿後、一たび豊後路清海太夫と改めし事ありきと雖も、清水の姓の絶えん事を憂ひて、切に乞ふものありければ、更に清水と稱して師の姓を襲ひしが、文化十一年市村座の出勤よりして清元と呼び、延壽齋と號せり。二世延壽齋即ちこれなり。文政八年を以て歿す。時に四十九歳。

富士松薩摩

鶴賀若狹掾

新内節

かくて常盤津は富本となり、富本更に清元を出せり。これを豊後三流といふ。豊後節はたゞに此三系を以て當時に鳴りしのみにあらず、初代宮古路豊後の門人に、加賀太夫あり、延享四年を以て富士松薩摩掾と稱す。鶴賀若狹掾は、此の門より出でし人なり。若狹掾はじめ宮古路敦賀太夫と稱し、師と共に改めて、富士松敦賀太夫と呼べり。後師と絶ちて、姓を朝日と改めて、官の禁ずる處となり。寶曆八年更に改めて、鶴賀若狹掾といへり。天明六年七十歳にして歿す。狂歌を以て有名なる鶴翁とは、即ち此人のことにして、嫡女鶴吉父の跡を嗣ぎて又名あり。彼の悽怨の調を以て間ゆる新内節も、亦富士松薩摩の門人鶴賀新内のはじめたるものなりき。新内はもと鶴賀若



鶴賀新内歿

狹の門人にはあらざりきと雖も、當時新内節の行はるゝを見て、家名を鶴賀と改めくれなば、我家門の繁昌ならむと、若狹掾の懇望もだし難く、則ち鶴賀と改めしなりといふ。寶曆の頃より弘く世に行はれたり。安永三年六十一歳にして歿し、其子加賀吉加賀八太夫と稱して其跡をつぎ、門人加賀歳二代の新内と稱す。加賀歳の門人島太夫、三代の新内となりて天保年間盛んに行はる。

藺八節

豊後節は、以上の外なほ傳ふべきものあり、藺八節これなり、宮古路藺八に出づ。藺八は豊後掾の門人、宮古路繁太夫に就きて學びし人なり。明和年間江戸に下り、中村座に出勤して宮古路鸞鳳軒藺八と稱せり。寶曆明和の頃、藺八節と稱して一時三都に行はれたりといふ。藺八一たび江戸

豊後節以外の諸流

一中節中絶

に下り、意の如くならざるを見て歸京せりと雖も、門人春太夫江戸に止まりて春太夫節と稱して世に行はる。轉じて豊後の流以外の諸流につきて記す處あらむとす。彼の寛保延享の頃世に行はれたる大薩摩主膳太夫の流なほ存して歌歌舞伎に出勤したることありといへども、僅に勇士の出端、荒事にのみ用ゐられて豊後の影をだに望むこと難く、都一中の流、又歌舞伎に出勤したれども、其末流常盤津の起るに及びて、寶曆の初年中絶の不幸に遭遇し、江戸節は僅かに助六の狂言に用ゐられたるのみ。江戸の諸流は前にも述べたるが如く、河東を除きては、殆んど絶滅の域に沈淪し、河東も亦日本橋の魚河岸、淺草藏前の扎差にうたはれ、金満家の間に行はれたりといへども、



一中節再興

長く其生命を維持すること能はざるに至りぬ。而して之れに代れるものは、再興せる一中節なりき。

一中節の再興は、寛政四年三月、千葉嘉六によりて行はれぬ。嘉六五代の一中となりて其流を弘むるや、文政の頃より漸く勢を得て、遂に河東の根拠を奪ふに至れり。五世一中の三絃は山彦新次郎なりき。新次郎、都、河東の二流に通じ、都には菅野序遊と名乗り、河東には山彦新治郎と稱せり。豫言して曰く、河東は永續せざるべし、必ず一中之れに代らむ。子孫我業を嗣がん者は、菅野をつぎて、山彦をつぐ勿れと。序遊は、文政の初年に歿す。果して其豫言は的中し、都一中の流日を追ひて盛んなり。かくて五世一中も、文政五年七月に歿す。爾來連綿として明治の今日に及び、八世

山彦新治郎の豫言

一中は去る明治十年八月に歿せり。

河東又忘れられんとす。江戸の諸流は衰退しつくして、ひとり京坂の諸流のみ盛んなるに至りぬ。義太夫の盛んなるは、操の行はるゝと、行はれさるとに關せざりき。常盤津、富本、清元の三流は三世二世をつぎ、四世三世に接し、相榮えて互に倒るゝことなく、各江戸の三座に出勤し、巧に所作に合して其勢を挫かざりき。新内の流に至りては、柔婉にして節の變化に乏しく、所作の出語には適せざりしを以て、文化の末年稀に出勤したるのみなりといふ。

常盤津は、二代目文字太夫の弟に兼太夫の如き名手ありて其根を固め、今なほ盛んなりと雖も、富本の全盛は、文化、文政、天保の當時なりき。常清二流を凌駕して其勢ひ凄ま

富本の盛衰



じく、寛延以後明治の初年迄、俳優の所作も多くは富本の地によれりしか、嘉永五年を以て受領せる四代豊前掾の歿後、相續すべき名人を得ず、現今にありては藝名を有するもの僅かに三四を數ふるのみ。

河東衰ふ

河東亦然り、一中に奪はれてより、一中が都、宇治、菅野の三派に分れて、藝人の數、百人に達せるに反して、現今の衰勢は富本と其類を同じくす。蓋し河東の流は、聲を要する事多くして、其曲節學び難く、一中は簡易温雅なるに由るといふ。富本も亦聲を要すること多くして、文化文政より四五十年の間、富本にあらざれば音曲にあらずと賞美せられたる勢は、清元の爲に奪ひ去られぬ。清元の流行する所以のものは、如何にも語るに樂で、喉でこるがし鼻へぬく

河東富本衰退の原因

清元の流行する所以

といふ、極、たやすき語り方にして、其上節回しは、上げたり下げたり、大氣取に氣取らるゝものなれば、語る者も聽く者も、共に面白きに基因すといへり。殊に二代目の太兵衛、拔群の名手にして、清元の流布は此人の力最も多きを占む。十餘年前より、古來義太夫のみ盛んなりし大坂の地にも流行して、現今之れに比すべき勢を有するものはあらざるなり。

繁太夫節

なほ今世に存するもの二あり。豊後節の餘波にして、一を繁太夫節といひ、一を藺八節といふ。前者は藺八の師の流にして、上方唄の中に存して、京坂の盲人之れを傳へ、後者は春太夫の門人山城屋清八に出づ。清八かつて京に行きしに、橋の袂の物乞の調奇異にして耳にせし事あらざり

山城屋清八



宮園千之

ければ其流を問ふに、蘭八節と答ふ。清八此物乞を伴ひて江戸に歸りぬ。馬糞も昔は野の薄きりぎりすとめて鳴かせし事もある習ひ、物乞も亦ソレシヤの果てなりければ、清八之れに十段を習ひ、自ら宮園千之と稱して一流を樹つ。深川に住して世に行はれ、天保五年を以て歿す。門人に千秀、千壽の二女あり。千秀又榮吉といふ、いたく世に稱せられ、嘉永年中に歿す。千壽は品川の妓なり、熊と呼ぶ。これ又曲に委しく、慶應二年先師の追善を營み、蘭八節の正本と刻し、明治元年四月六十三にして歿す。此流もと十段を以て一流を立てたれば、之れを持讀せんこと難く、千壽の死と共に絶えたりしが、其後大槻如電氏再興に力を致し、現今語り得るもの十有餘名ありといふ。

蘭八節再興

現今の諸流

再び現今行はるゝ諸流を列舉せんか、曰く義太夫節、清元、常盤津、一中、蘭八、富本、河東、大薩摩これなり。富本河東の二流は、氣息奄々たり。大薩摩もとに角相續して、現今十二世と數ふれども、殆んど長唄の附屬と誤たる。義太夫節の全國一圓に流布して盛んなるは、操りこそ到る處になければ、寛延の當時と異なるなく、歌舞伎に出るも亦人の知る處なり。加ふるに近年娘義太夫の勢力、寧ろ恐るべきが如し。爰に少しく女義太夫の沿革を叙して、其聽衆の多くは如何なるものなるかを説かん。

女義太夫の沿革

淨瑠璃の樂の因を婦女子に有するは、創始時代よりの事にして、小野お通はいはずもあれ、六字南無右衛門、左門よしたか等出で、慶長の昔、四條河原に盛を競ひ、寛永の末



娘淨瑠璃禁  
ぜらる

年女歌舞伎と共に禁ぜられたるは、既に説きたる處なり。寛文の頃には、吉原に因幡ありて近江節に長じたるをも説きぬ。土佐節の行はるゝにつれ、婦女子も三絃を弄して淨るりを口にせしより、遂には南無右衛門等の如く、一定の樂場を開きて人を集むるに至りしか。寛天見聞記に、娘淨瑠璃、女髮結、地獄の類の禁ぜられたるを載す。又松平伊豆守が令して、婦女子にして三絃を弄するは驕奢の沙汰なりと制したるも、寛政年間の事にして、娘淨瑠璃の類一時地を拂ふに至りしか。享和以降文化文政に及びて再び盛んとなり、操の衰退して、素語りの行はれしと共に、天保年間には特に娘義太夫の勢力甚しかりしものゝ如し。天保十三年娘淨瑠璃藝品定の書、比文舍鬼笑によりて編せ

娘淨瑠璃再  
び起る

女義太夫の  
再禁

られ、當時の役者と組みて品評したるものあり。此頃竹本晴喜、豊竹巴山、豊竹巴女、豊竹小でん、豊竹巴若等最も江戸に名あり。全年水野越前守令して、神道講釋、心學、軍書講談、昔話の四を以て寄席に限るや、女義太夫は禁令に觸れて入獄し、當時の呼び物、巴山をはじめとし、巴丈、此勝、此久等四人の半死を見るに至れり。天保八年の計算によれば、江戸のみにても寄席の數、百を超えたりと。其繁榮なりしこと現今に比すべし。されば禁令嚴命によりて一時は之れを防止するを得べしと雖も、世の望む處のものは到底命令の下に永く拘束し得べくもあらず。十三年の禁忽ち弛びて、又再び盛んとなり、嘉永安政の頃には、兩國廣小路、上野山下、淺草公園、淺草奥山、采女ヶ原等にさゝやけき小屋



を設けて興行し、嚴かなる腰帶、裾短かなる衣服、島田番と若衆番とは、一見して其娘義太夫なると知られきといふ。これに墮落する者多く、旗本の令息、滞京の田舎武士、互に愛顧を争ひて、屢椿事を惹き起したることもありき。維新前後に至りては、女義太夫の寄席甚だ稀にして、傾廢を極めたりきと雖も、京都の誓願寺内、大坂の法善寺裏等は何れも盛んなりき。

東都近年の流行繁盛は改めて説くを俟たず。これ明治六七年の頃、名古屋地方より、竹本京枝が上京したるより以來の事なり。

文化文政の頃には、江戸に寄席百有餘を數へ、一たび女義太夫の禁令出でし時、俄かに其數の半ばを減じ、天保年間

にも、百數十ヶ處ありきといへども、今日の如き大廈麗屋にはあらざりき。寺門靜軒、江戸繁昌記に女義太夫を記して曰く、

壇上低簾金鏤晃々、繡出、蟲負連中等、數字、簾内有聲唱其所、按曲名爲何、拆響、簾捲、太夫粧飾端整、尻紅錦蒲團、鼻、銀鏤歌案、麗美奪目、三絃調定、徐々按起、女而男喉、婦而女粧、引宮、刻羽、縹緲遲廻、行雲不日、神將逝之間、使入不覺、絶倒、恍惚垂涎、欲飲泣哉、賞音者有喜、節者而觀者較多、於聽者何也、曰妙有、神史家某言曰、二人聽曲、而歸、某問、度曲、巧拙、甲流那、辨矣、特守其面而已、因向乙叩其美醜、曰吾眼一注、其腰帶間、如聲與色、吾不大之也、相視大笑、是謂之觀。



今や果して如何、観る者と、聴く者と何れか多き。曲節の巧拙を論ずるものよりは、美醜を論ずる者多く、耳をすまして聴く者よりは、一に眼を腰帯の間に注ぐ者のみ多しといはんも、強ち過言にはあらざるべし。(風俗畫報女義太夫の沿革による)

新内の現況

他の一派新内は、今なほ到る處に行はれて、鶴賀、富士松、岡本、宮本の四流に分れ、深夜寒月の下門をながして、花の便りの呼び聲と共に、悽怨悲哀の音を傳ふるは、又よく人の知る處なり。明治の初年迄までは、新内の吉原に入るを許さざりき、これ之れをきく時は、遊女に眞情を生じ、情死をなすに至らしむるを以てなりきと。今や果して如何、新内を聞きて、これが爲めに死を企つるものありや否や。

附記。

諸流起伏の一章、多くは聲曲類纂及び大槻如電氏の俗曲の由來に依れり。なほ後編の年表によりても、豊後三流の消長を伺ふべきものあるを以て、ここに詳説せず。

淨瑠璃井に操略史終



宮古郡西ノ山嶺西ノ大附城

湯水秀  
湯水秀

湯水秀  
湯水秀

湯水秀

湯水秀  
湯水秀  
湯水秀  
湯水秀

湯水秀



淨瑠璃諸流系譜

淨住檢校  
瀧野檢校

薩摩淨雲

薩摩太夫 大薩摩次郎右衛門

虎屋長門掾

杉山丹後掾

近江大藏頭

櫻井丹波少掾 和泉太夫

江戸肥前掾 江戸半太夫 十河月

虎屋水閑

外記太夫 佐 内 大薩摩主膳太夫

土佐掾 權正勝 廣瀬式部太夫 手品市左衛門

上總少掾 藤原正信

虎屋源太夫

伊勢島宮内 宇治加賀掾 宮松 野田若 立花河

井上播磨掾 井上市郎太夫

清水理兵衛 竹本筑後

山本角太夫 松元治太夫

岡本文彌 衣具又四 阿波太

都太夫 一中

宮古路典



諸流系譜

江戶半大夫—十河見河東

關式部大夫

品市左衛門

左 内—大藏主藤大夫

治加賀椽

高松藤原  
野田若依  
立花河内

上市耶大夫

水理兵衛—竹本筑後椽

豐竹越前少椽  
豐竹肥前椽  
豐竹筑前少椽  
竹本播磨少椽  
竹本大和大夫—竹本大隅椽

元治大夫

木文綱  
表具又四郎  
阿波大夫

大夫一中

五世(千葉嘉六)

宮古路豐後椽

常盤津文字大夫

宮本豐前椽

富本齊宮大夫—清元延壽齋

富士松藤原椽

鶴賀若狹椽

鶴賀新内

宮古路繁大夫

宮古路團八

山城屋清八—大槻如電



卷之二十一  
 卷之二十一  
 卷之二十一  
 卷之二十一

五  
 四  
 三  
 二  
 一

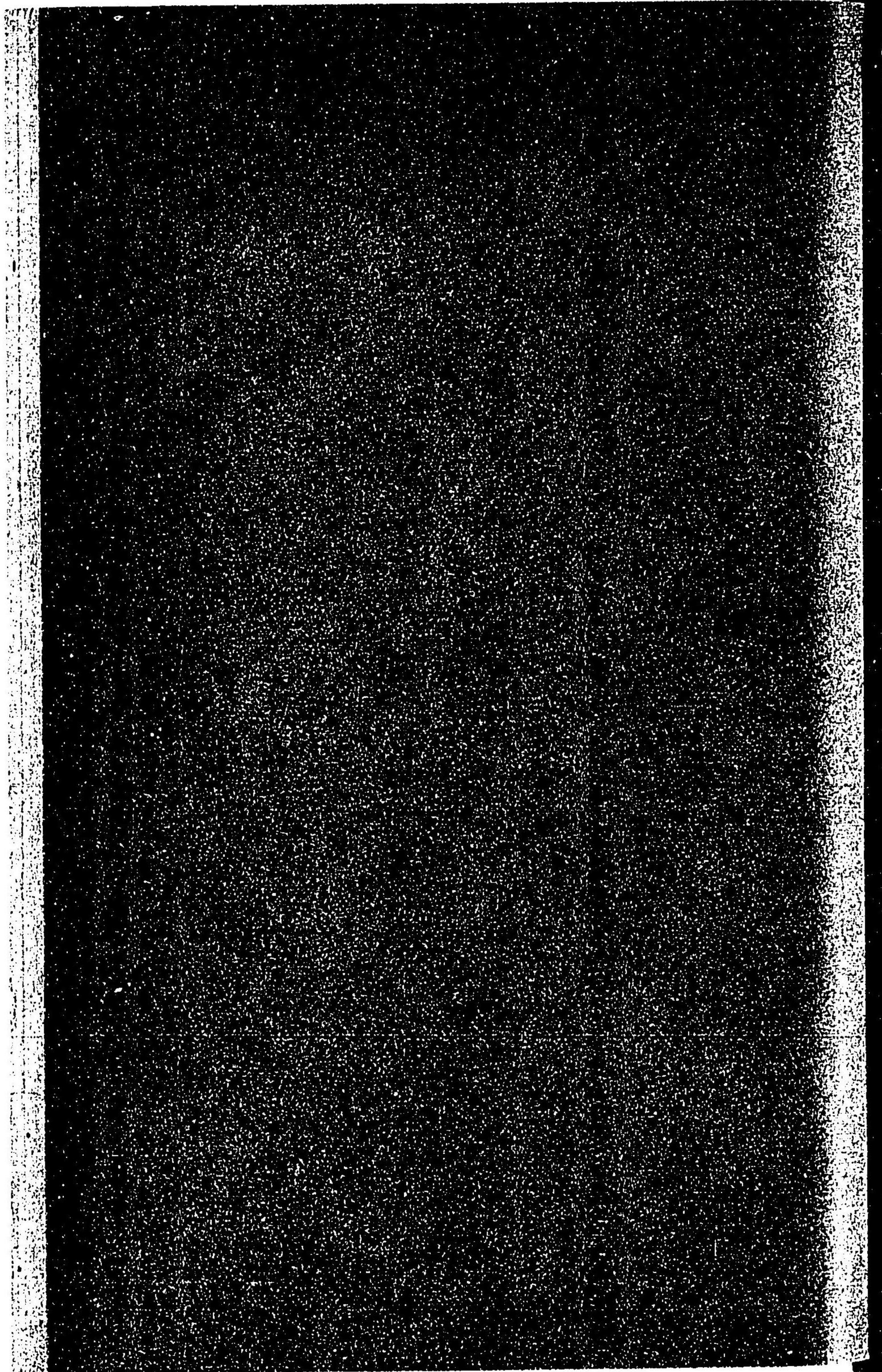
卷之二十一  
 卷之二十一

卷之二十一  
 卷之二十一

卷之二十一  
 卷之二十一

卷之二十一  
 卷之二十一

卷之二十一  
 卷之二十一





## 年表緒言

年表は、淨瑠璃の書に見え初めたる、享祿にはじめて、文  
化に終れり。段淨瑠璃の作多くは此時代迄になりたれ  
ばなり。文政より安政迄は、まゝ注意すべきものあれば、  
其後に附せり。載する所、多くは義太夫節にのみ關し、豊  
後三流の消長に至りては、其詳を悉くし得ざりき。これ  
其材料の拾集、頗る困難なりしによる。遠からず、文政以  
降、明治の近年迄を序して、其後をつがんと期す。  
年表は、上下二欄に分ち、上欄には、淨瑠璃節の太夫、外題、  
作者、興行座等を年次に列記し、下欄には、上欄の註解、太  
夫折々の役割、又は歌舞伎に出でて語りたる外題、並ひ  
に太夫等を掲ぐ。

◎印を載かしめて、一段低く掲げたるは、何れも歌舞伎



のことに關す。其左迄緊要ならざる事を掲げて、所載の  
少なきは、淨瑠璃との關係如何によりて、取捨したるに  
よる。前半の史と併せ示さんが爲めのみ。  
材料の出づる所、多くは正本にありと雖も、聲曲類纂外  
題年鑑、竹豐故事、淨瑠璃譜、今昔操年代記、名人忌辰錄、歌  
舞伎年代記、戲場年表(關根只誠翁著)等によれる所また  
尠からず。多くは其出所を示せり。

- (外)ハ外題年鑑の畧、
- (譜)ハ淨瑠璃譜一名諸事聞書往來の畧、
- (忌)ハ名人忌辰錄の畧、
- (嬉)ハ嬉遊笑覽の畧、
- (聲)ハ聲曲類纂の畧、
- (雲)ハ雲錦隨筆の畧、
- (操)ハ今昔操年代記の畧、

### 淨瑠璃操年表

<p>享 祿 (三二八七)</p>	<p>四年、田舎(宇津山邊)の小座頭。淨瑠璃を踊る。 (宗長日記)</p>
<p>天 文 (三二九四)</p>	<p>元年、織田信長生る。 九年の守武千句に。次の句あり。 前句 いといたに座頭まがひの杖つき の、 附句 淨瑠璃語れどもまびのもと、 又附 こよひ早や時は半若更け果てし、 (還魂志料)</p>
<p>弘 治 (三二七五)</p>	
<p>永 祿 (三二八八)</p>	<p>三絃、琉球より渡來す。</p>

享祿、天文、弘治、永祿

○三絃渡來の時代につきては、永祿年間なるものと、  
文祿年間なるものとあり。前説は、竹豐故事、大  
體、近代世事談、糸竹大全等。後説は、三絃考、糸  
竹初心集等。



<p>元龜 (二三三〇)</p>	<p>二年七月十五日、田裁座頭淨瑠璃を語る。 (山科中納言言繼卿日記)</p>
<p>天正 (二三三三)</p>	<p>四年。薩摩淨雲生る。(慶)</p>
<p>文祿 (二三三三)</p>	<p>四年。薩摩淨雲生る。(慶)</p>
<p>慶長 (二三五六)</p>	<p>○盲人澤住(澤角)、淨瑠璃を三味線に上す。 (慶) ○澤住の門人、目貫屋長三郎(京の人)、西の宮 傀儡師、引田某を語らひ、淨瑠璃に合せて 人形を操ることを始む。 禁闕に召され、後陽成帝の歡覽に供す。 (和漢三才圖會むぎこがし) 慶長二年、操を豊太閤の上覽に入る。 (慶長の古記)</p>

○操の始につきては階院一定せず。故小中村博士の歌舞音楽書史に從ひて掲ぐ。

○歌舞伎 慶長年中出雲、阿國が女舞に始る。

阿國も出雲の巫女なり。名古屋山三郎これに隨身し、傳助さいふもの又これ一座まで歌舞をなす。男女混淆にして、男は女装をなす、女は男装をなす。鳴物は鉦笛鼓に限り、未だ三味線を用ゐず。

(懷德殿東海道名所記福山文集)  
慶長八年八月、今年春より女歌舞伎阿國に下るる古記に見ゆ。(摺)

<p>元和 (二三七五)</p>	<p>二年三月五日小野も通歿。(名人忌辰録)</p>
<p>寛永 (二三八四)</p>	<p>○初年、薩摩淨雲江戸に下る。 十二年、島田万吉といふ名代にて、京の四條、五條、北野、祇園、に於て、淨瑠璃及び歌舞伎を興行す、二三十日間程づゝ勤む。 (山城名跡志) 同年薩摩淨雲の淨瑠璃禁せらる。人形の衣裳道具立等の飾に過まを以てなり。 (玉露叢)</p>

慶長十二年、京都より阿國江戸に下る。

慶長十九年、京都六條の遊女、芝居能と稱して、佐渡島、まのぶ、の兩大夫元何れも歌舞伎を興行す。  
(古今役者大全福山文集)

○寛永元年、猿若勘三郎歌舞伎狂言興行の願許さる。猿若の隣は、能の間の狂言の如ま。(歌舞伎年代記)  
江戸中村座の元祖これなり。  
十一年、村山又三郎(堺の人名こや山三の弟子)歌舞伎興行の願許さる。  
江戸市村座の元祖なり。  
十九年山村小兵衛(後長太夫)又許さる。

○寛永十五年虎屋喜太夫堺町に於て脱教淨瑠璃興行○二代目の國女、五條にて芝居興行せし時、島田万吉さいふ女あり。才智あるものにて、共にこれを計り、女名代さいふこを始め、淨瑠璃操をなし、切まく



<p>十六年正月 南無右衛門の正本八島開板。 板元 京二條通御幸町西へ入町上るりりや喜右衛門</p> <p>十九年十月十六日、竹本某口宣を拜して、若狹様と稱す。(役者五雜俎。聲曲類纂に淨瑠璃芝居と見ゆ)</p> <p>二十年、藤原虎屋が操淨瑠璃、江戸の禰宜町に於て興行せらる。</p> <p>(東めぐり 寛永廿年印本) 色音論同</p> <p>○末年女淨瑠璃禁せらる。(東海道名所記)</p>	<p>正保 (二二〇四) 三年、十二段童子の印本成。</p> <p>淨雲の門人、丹後太夫、丹波太夫、長門太夫、源太夫、此頃四天王と稱せらる。</p> <p>慶安 (二二〇八) 二年 近松門左衛門生る。</p>
<p>なも始めた。其比六字南無右衛門といふ女太夫、同去く操を興行す。云々 (歌舞伎事始)</p> <p>○淨瑠璃踊るもの、某少様、大様、太夫、など稱する。元來、人形作りて禁裏へ奉りしものに、受領を許されけるが始めなり。其淨瑠璃を人形に合するに及び、踊る者の方勢ひ強く、つひに人形道の受領を奪ふに至れり。(蘭海)</p>	<p>○寛永の末年、女歌舞伎禁せらる。故舊者を出すに至りしを以てなり。以後若衆歌舞伎行はる。</p> <p>○慶安五年、大坂に於て鹽屋九郎右衛門、大坂太左衛門、松本名左衛門の三人に權を許さる。(歌舞伎事始)</p> <p>同年、若衆歌舞伎禁せらる。男色の弊風盛になりしを以てなり。</p>

<p>承應 (二二二四) 元年夏、淨雲の弟子丹後太夫、京に上り四條河原に於て芝居興行す。</p> <p>○源太夫の門人、伊勢島宮内京に上る。</p>	<p>明曆 (二二二五) 三年七月十三日、喜太夫口宣を拜して、虎屋上總様藤原正信と稱す。</p> <p>○岡島吉左衛門、近江大様を受領す。</p>	<p>萬治 (二二二八) 元年十二月朔日、阿波の人竹田某、人形を製して雲井に捧げ、出雲様を受領す。</p> <p>○虎屋源太夫上京す。京都の人、井上市郎兵衛源太夫に學ぶ。</p>	<p>寛文 (二二三二) 元年十二月二十三日江戸町觸。</p> <p>諸見物芝居仕候者、塚町、萱屋町、木挽町五丁目此處にて可仕候。自今以後、他處にて堅仕間敷事。(嬉)</p>
<p>○承應二年 若衆歌舞伎禁せられて、難逃の者多かりしかば、村山又兵衛の歎訴により、物真似狂言盛名稱を改めて許さる。これ京插劇の始なり。これより先、元年京都に歌舞伎芝居の禁令下れり。(役者大全、歌舞伎事始)</p>	<p>伊勢島節 京都 伊勢島宮内の始むる處、承應の頃より世に行はる。</p> <p>語齋節 江戸 杉山丹後様の門人岡島吉左衛門の始むる處、承應明曆の頃より世に行はる。</p> <p>○島原狂言を仕組み、傾城の真似すること禁す。(江戸) 明暦元年五月のことなり。</p> <p>○寛治三年、藤田勘彌、木挽町に興行す。これ江戸森田盛の元祖なり。</p>	<p>肥前節 江戸 杉山丹後様の男、受領して江戸肥前様藤原清政といふ。堺町に於て操芝居を興行す。寛文の頃、一派を語り出し肥前節と稱して、世に行はる。其子牛之盛、後二代の肥前となる。</p>	<p>承應、明曆、萬治、寛文</p>



二年、竹田出雲様大坂に下りて、からくり芝居を興行す。

三年、紀海音生る。

四年正月八日江戸町觸、前畧狂言盡は不及申、淨瑠璃芝居、其外諸芝居にて、島原狂言仕組、傾城の真似一切仕間敷事。

同年同月、和田酒盛判大薩摩六段物正本

板元 二條通正本屋九兵衛

五年、西澤一風生る。

五年七月結城孫三郎登屋町に操人形座免許是太鼓矢倉を上げし始なり。(戲場年表)

六年 近江齋齋堺町に於て人形芝居を興行す土人形なり (全)

全年十月江戸肥前椽操芝居登屋町に櫓を上げ看板に天下一と配せり。(全)

九年 天満八太夫(説教)堺町に於て操座興行。(全)

十一年 和泉太夫堺町に於て操人形座興行、願人野呂松勘兵衛。(全)

◎寛文四年、市村座に續狂言引幕大道具立始まる。  
同年、大坂の福井彌五右衛門非人仇討といふ續狂言を作る。江戸の市村座にても、都府内に計りて今川忍車といふ續狂言を始む。  
九年、京都に七ヶ處の櫓を許さる。  
十年、大坂に鹽屋九郎右衛門の芝居立つ。

延寶

(三三三三)

全年江戸孫三郎(説教)堺町にて興行(全)

○井上市郎兵衛、一流を飾り出して浪花に下る。受領して、井上大和椽藤原要榮と稱す。後又榎磨椽と受領す。

○寛文中十二段草子の活板本出づ。

元年、丹後太夫、口宣を頂戴(受領)して杉山丹後椽藤原清澄と稱す。其子又受領して江戸肥前椽藤原清政と稱す。  
此頃の太夫櫓幕に天下一と配す。これ受領の證なり。

三年、宇治嘉太夫、伊勢島宮内の名代を以て操を始め。初興行の外題

大磯虎遁世記 新作

五年正月、西行物語 太夫宇治嘉太夫

ワキ 五郎兵衛

同年十二月朔日、山本角太夫受領して山本土佐椽藤原房正と稱す。

宇治嘉太夫も受領して、宇治加賀椽藤原好

土佐節

江戸

◎元年、元祖市川團十郎荒事を始め。  
二代目薩摩次郎右衛門の門人、内匠虎之介自ら一流を飾り出す受領して土佐少椽橋正勝といへり。寛文延寶の頃より土佐節と稱して世に行はる。

角太夫節

京都

源太夫の門人、山本角太夫の語る處、延寶の頃より世に行はる。淨瑠璃外題左の如し。  
角太夫の正本傳ふるもの稀なり、瀬口横笛紅葉之遊覽といふ正本の奥書に、延寶四丙辰年霜月角太夫正本寫云々。

- 角田川 小野 莖 天親 善藏
- 愛蔵 若 阿漕平次 傳教 大師記
- 玉照 君 源氏蓬萊三ツ物 久米 仙人
- 三條 小銀治 都志 玉丸 女人 往生記
- 飛騨 内匠 管光 寺開帳 信田 妻
- 天王寺 彼岸中日 浦島 太郎 四十八願記



澄と稱す。

六年六月二十七日大久保加賀守將軍御慰の爲め虎屋源太夫の操を二の丸に於て上覽に入る。

(万天日記)

六年八月、清水寺利生物語 太夫松元治太夫。同年十一月二十八日、富松薩摩口宜を拜して富松薩摩橋橋常信と稱す。

同年。万屋助六心中 大坂山本土佐様座

三社託宣由來 太夫 都太夫一中

八年四月十日、將軍家綱淨瑠璃操を見る。外題。

酒香童子 太夫 土佐少様 (土佐少様は土佐少様橋正勝)

同年同月二十七日、將軍家綱永開太夫の淨瑠璃操を見る。(一話一言)

○此頃天下一と記す事を禁せしむる。

天和

(三三四一) (三三四二) (三三四三)

石 童丸 日蓮上人總行記 酒頭童子

眉間尺物語 小栗判官 三世二河白道

鉢かづき 信田小太郎 小・敦 盛

逆襲王子横車 入鹿大臣 平親王將門

因幡堂開帳 袈裟御前物語

四教寺七万日回向 熊井太郎奉行の巻

花山法皇願證記

○助六の情死は、承應二年二月十一日なり。正徳年間、歌舞伎に仕組まる。花江戸歌舞伎年代記に曰く、

正徳三年 山村座花橋愛護樓 團十郎あけ

まきの助六大當り。○五代目市川白猿曰く、

一中淨瑠璃、珠の外流行りけるに、元祿の頃、

頭、腕の無休といへる遊客のありしを取入れ、

花川月の助六といふ男立の、元吉原へ通ひし事を今あげ巻に仕組みて、祖父團十郎

津打治兵衛に相談して作りしと云々。中喜突情の道中江戸節淨瑠璃にて、云々。

○延寶年中 京四條繩手井上播磨橋の芝居に小山次郎

三郎といふもの女人形の上手にて女人形を小山といひ

遊女の輩をも小山といふに至れり。(近代世談) 此頃又江戸の和泉太夫座に、野呂松勘兵衛といふ人

あり。頭平めにして、顔の青黒く賤しげなる人形を遊ひしは、これを野呂まゝ人形といひ。稱して愚かに

鈍き人なるまゝ呼ぶに至れり。(露館隨筆) 幕太夫節又加賀節 京都 宇治加賀橋の流なり。延寶年間よりひろく世に弘ま

貞享元

(三三四四) (三三四五) (三三四六) (三三四七)

二月朔日竹本義太夫、道頓堀西の芝居にて、操芝居を興行す。外題は、宇治加賀橋の古淨瑠璃。

世繼曾我

作者 近松門左衛門

四月八日増補藍染川

竹本座 宇治加賀橋古淨瑠璃

五月十九日井上播磨橋京都にて歿。五十四歳

播磨の樂、遺強にして、殊に景事に長

す。一生の間に語りたるもの數十種。

其内眞林子の筆に成れるものもあり。

其詞章雜駁のものにても、音吐朗々、

曲節和合し、一たひ聴きては忘れ難かり

きと。清水理兵衛と井上市郎太夫と

は此人の門より出でたる名手なり。

七月十五日いろは物語

一心五戒魂

竹本座

○天和四年二月二十一日貞享と改元す。

文類節 浪花

山本土佐様の門人、岡本文類天和貞享の頃によ、伊藤出羽橋が芝居にて一流を語りひろめ、文類節と號して浪花中にもてはやる。

○井上播磨橋井に門人井上市郎太夫清水理兵衛興行外題。

新十二段 二玉の本地 日本廻り

舟 遺恨 女 袖 鏡 都女商人

二親 奉行 金平法問 白旗の山來

敵討の遺恨 五天 笠 祇園橋舎

天鼓(近松作) 大友 眞鳥 日本王代記

在柄の平太 神道 蟻 通 百合若 鹿

甲賀の三郎 源平戀の遺恨 金剛兵衛 左文

長谷寺利生記 土蜘蛛退治 田村將軍初親

兵庫の樂島 二代の敵討 田村將軍初親

利風物語 一休物語 頼光跡目論

源氏筑紫合戦 根元曾我物語 翠徳太子傳記

樂平一代記 源氏熱田合戦 頼義北國落



九月二十一日賢女手習鑑  
作者 近松門左衛門  
竹本座  
井上掃磨像古浄瑠璃

○本年薩摩外記堺町に操興行をなす。

◎宇治加賀様、七、伊呂波(五段續浄瑠璃)を、四條小橋つばやをして八行に板行せしめ、節章を示し、直の正本を號して、世に出す。これ替古本の始。  
(操、外)

正月二日頼朝七騎落

作者 近松門左衛門  
竹本座

二月四日出世景清

作者 近松門左衛門  
竹本座

(義太夫が爲めに作れる初作)

七月十五日 佐々木大鑑(佐々木先陣)

作者 近松門左衛門  
竹本座

九月十三日 多田満仲記

作者 近松門左衛門  
竹本座

三

花山院物語 頼朝七騎落  
菅原親王行狀  
記 大曾我富士牧

源氏物語 日尚景清  
信濃源氏水會

賢女手習鑑 大念佛由來  
三浦道寸軍法

大藏冠知略玉 河津相摸の遺  
起 東大寺大佛緣

楠千早合戦 三浦大助老後

源氏東の門出 五大菩薩(井)  
待賢物語(清)

源氏東の門出 上東門院(清)  
松浦五郎旅日記(清)

○二年四鶴曆を作る。

永閑節 江戸

浄雲の門人、源太夫の弟子、虎や永閑、一派をなし貞享元祿の頃、永閑節と稱して世に行はる。奥服町に住んで堺町に操芝居を興行す。

○遊君三世相 開板 (天鼓の吹作増補なるべしといふ)。

外記節 江戸

薩摩外記薩摩直政にはトまる、二代目薩摩次郎右衛門の弟子にして、長門太夫の甥なりといふ。一派を語り出して世に行はる。堺町に操座を設けて興行す。

四

◎宇治加賀様、京より浪花に下りて、曆を語る。義太夫の方にては、賢女の手習并新曆と題して相争ふ。義太夫好評を得、加賀様半ばにして京に歸る。(操)

正月八日達磨の本地

作者 未詳  
竹本座

三月より竹本座中國地方へ行く。

七月 岡清兵衛歿 (忌)

名は重俊 櫻井丹波様の爲めに、有名なる金平本を作れる人なり。此人の死後金平本衰ふ。

○本年三月、歌舞伎狂言并操座太夫役、名主附添、南奉行北條安房守殿 罷出、以來看板に天下一の號書認候儀、不相成旨申渡さる。  
(戲場年表)

中村座(歌舞伎)の酒吞童子は、外記節より出でたるものなりといふ。

式部節 江戸

土佐様の門人廣瀬式部太夫より出づ。貞享元祿の頃、式部節と稱して世に行はる。河東の節付、これより出づるもの多し。

手品節 江戸

土佐様の門人手品市左衛門の語る處、世に行はる。河東の節付、又これにもよるといふ。

若山節 江戸

貞享元祿の頃、若山五郎兵衛一派を語り出して世にはやさる。何人を師とせし、明ならず。此人は又小唄をもよくしたりといふ。

江戸節又半太夫節 江戸

江戸半太夫は始め歌舞文の上手なりしが、肥前太夫につきて浄瑠璃を學び、つひに一家をなし、堺町に操芝居を興行す。正徳の頃難産して、坂本築後といへり。貞享元祿の比より世にもはやされて今に至る。十河見河東此門に出づ。半太夫節詞章の作者は塚原市左衛門なりといふ。



元祿元

(三三六八)

正月二日源氏冷泉節

竹本座 近松門左衛門

夏竹本座江州大津より伊勢へ行く。  
十月十二日大塔宮熊野落

竹本座 作者 未詳

正月二日定家卿小倉色紙

竹本座 作者 未詳

三月三日天智天皇

竹本座 作者 近松門左衛門

夏竹本座泉州堺より紀州へ行く。

八月十五日今様柏木

竹本座 作者 未詳

冬竹本座京都北野へ行く。

正月十四日自然居士

竹本座 作者 未詳

○本年正月より、近松門左衛門京都より浪花に下り、専ら義太夫が爲めに淨瑠璃の作をなす。

○貞享五年九月三十日貞享を元祿と改元す。  
○竹田出雲清定生る。

治太夫節 京都

山本角大夫の門人松元治大夫、貞享元祿の頃一派をなす。世に之を治太夫節といふ。自ら芝居を興行す。其外題は。

清水寺利生物語 石川五右衛門 鎌倉袖日記  
源氏烏帽子折 牛若東下向 八島合戦  
高砂

表具屋節 大坂

岡本文彌の門人表具又四郎、貞享元祿の頃一風をなす。多くは井上掃磨の浄瑠璃を語れり。

○今様柏子は、井上掃磨の古浄瑠璃、金平法圓の語を改めたるものなり。加賀の門人、富松某の忠臣身替物語と名つけて興行したるものなりといふ。外題を改めて、同上浄瑠璃を何れの座にも興行するは、延寶以後の習はしなり。掃磨の花山院物語を加賀にては弘敷殿(加打)と改め、日向長清を松本治太夫方にては鎌倉袖日記と替へ、山本土佐の那志王丸を岡本文彌は山椒太夫と改め、加賀の團扇會我を義太夫興行して百日會我と改めたる類、皆これなり。

<p>三月三日源氏十二段</p> <p>夏秋は竹本座堺奈良和州へ行く。 十月十一日讃談記</p> <p>竹本座 作者 未詳</p> <p>竹本座 作者 未詳</p>	<p>正月二日今様柏崎</p> <p>春竹本座京都七の社へ行く。 四月八日日本西王母</p> <p>竹本座 作者 未詳</p> <p>竹本座 作者 近松門左衛門</p> <p>秋冬竹本座西國中國所々へ行く。</p>	<p>正月二日愛子、若都富士</p> <p>三月三日平假名太平記</p> <p>五月六日新本領會我</p> <p>竹本座 作者 辰松 幸助</p> <p>竹本座 作者 未詳</p> <p>竹本座 作者 近松門左衛門</p>
--	---	---



秋冬竹本座和州美濃尾張へ行く。

正月九日辨慶出生記

作者 竹本座 未詳

正月十一日岡本文彌歿 六十二歳

山本土佐椽の門人、一流を語り出し文彌節といふ。今も諸流に此節付を用ふ。(忌)

三月三日松風東帯鑑

作者 竹本座

夏竹本座京都中御霊の社内に行き、秋冬は北野七の社へ行く。

○八月 井原四鶴歿。

○文彌并に門人岡本阿波太夫興行外題

三樹 太夫 源恕上人記 墨雲太師記  
大藏冠方 阿彌陀坊 守屋大匠  
日蓮上人法難記 中將姫遊曼陀羅 三田八幡御傳記  
戀塚物語 百合若高麗攻 契史國物語  
長命寺開帳 中山利生物語 雁金文七  
善光寺開帳 照天姫操車 當世續日本紀  
三十三間堂棟山來

○同門人表具又四郎興行外題

木曾義仲 羅波 八景草紙 洗小町  
忠臣兵揃

七

八

正月二日齋藤別當實盛

作者 竹本座 未詳

三月六日多田院開帳

作者 竹本座 未詳

四月八日釋迦如來誕生會

作者 竹本座 近松門左衛門

夏秋竹本座堺奈瓦和州所々へ行く。

十月二日鎌田兵衛名所盃

作者 竹本座

九

正月八日忠信廿日正月

作者 竹本座 宇治加賀榎古淨瑠璃

夏竹本座伊勢へ行く。

作者 竹本座 未詳

四月十四日當麻中將姫

作者 竹本座 未詳

夏竹本座讃州より宮島へ行く。

作者 竹本座 未詳

九月九日義經追善女舞

作者 竹本座 未詳

一〇

二月朔日那須與市小櫻威

作者 竹本座 未詳

四月六日新板腰越狀

作者 竹本座 未詳

夏竹本座泉州堺より奈瓦へ行く。

作者 竹本座 近松門左衛門

七月十五日頼朝伊豆日記

作者 竹本座 近松門左衛門

十月十三日百日會我

作者 竹本座 近松門左衛門

○此本宗輔生る。  
○元禄十年、宇治加賀榎唱歌を集めて紫竹集といふ。  
今年六十三歳になりければ、七九集といふを、紫竹の文字に改めたり。

○百日會我は、近松門左衛門が宇治加賀榎の爲めに作れる團扇會我なり。竹本座興行の時大入にて、百日餘榎さまにより百日會我を改む。此頃は通常五六十日毎に芝居を改めたりといふ。(註)



<p>一一</p> <p>二月十四日今様小栗判官 竹本座 作者 近松門左衛門</p> <p>五月五日小野道風記 竹本座 作者 未詳</p> <p>六月五日義經東六法 竹本座 作者 未詳</p> <p>秋竹本座伏見中書島へ行き、夫より伊勢へ行く。 竹本座 作者 未詳</p>	<p>一二</p> <p>正月二日源氏烏帽子折 二度目 竹本座 作者 近松門左衛門 山本土佐権古淨瑠璃</p> <p>春竹本座泉州堺へ行く。 豊竹座 作者 錦 文流 宇治加賀権古淨瑠璃</p> <p>三月十一日東山殿子日遊 竹本座 作者 源三位頼政 宇治加賀権古淨瑠璃</p> <p>五月六日北海道虎か石 竹本座 作者 錦 文流 宇治加賀権古淨瑠璃</p> <p>七月十五日大職冠知密玉取 豊竹座 作者 錦 文流 井上播磨権古淨瑠璃</p>
--	--

○子日遊は、豊竹若大夫の語る處、若大夫が新に操芝居を設けたるは元祿十五年なれどもかりに豊竹座と掲ぐ。

○北海道虎か石興行の時、辰子手摺といふことを仕出し、人形の道ひ標を見せ、又紫語といふことを仕出し、操芝居に舞臺を付る事、此時を始とす。  
(榮大門屋敷)

<p>一三</p> <p>正月六日蒲島年代記 竹本座 作者 近松門左衛門</p> <p>四月八日淀鯉出世瀧徳 竹本座 作者 近松門左衛門 (近松世話浄瑠璃作の始)</p> <p>夏竹本座堺奈良へ行き、秋京へ行く。 竹本座 作者 未詳</p> <p>九月九日因幡薬師傳記 竹本座 作者 未詳</p>	<p>一四</p> <p>五月六日蟬丸 竹本座 作者 未詳</p> <p>○竹本義太夫受領して竹本筑後様藤原博教と稱す。時に年五十一。</p>
--	---

○豊竹若大夫、若輩の比より竹本の流儀を學び、家業はよその事にて、毎日芝居に入込み、忘る事なま。其比は竹本采女といへり。十八歳の時、筑後跡芝居に於て傾城懐子といふ上りの語られまが、まかトの事なく、其年も暮れ、明年東立慶町芝居にて、道其屋吉左衛門、永島重太夫、其門弟數多より合ひ、紫浄瑠璃の出語り、是もはわんまからず、半にて止みぬ。夫より修行の爲め、此處彼處に下り、堺、南の端にて芝居を取組み給ふ。折ふし糸屋の娘、手代の久兵衛と密通あらはれ、娘をつれ万代とやらんへかけ落ち、畑の井戸に身を投げ、兩人共に死せり。是幸と俄かに一段浄瑠璃に作り、心中泪の玉井といふ外題を出しければ、思の外當れり。大坂に歸り、長門九郎兵衛と相座本にて、舞の芝居に構舞、豊竹若大夫と改めはなやかなる看板堺土産心中泪の玉井と出まける。筑後方には曾根崎心中(十六年)兩家同下標なる仕組、何れも浪花の若衆に喜ばれ、京大坂の淨るり本屋、門をならべて此の積古本を板行せり。  
(操年代記)

○長町女腹切に仕組みたるお花半七の情死は元祿十二年八月なり。



<p>秋冬竹本座和州美濃尾張へ行く。</p>	<p>○八月 井原四鶴殺。</p>
<p>七月 正月九日辨慶出生記 竹本座 作者 未詳 正月十一日岡本文彌歿 六十二歳 山本土佐椽の門人、一流を語り出し文彌節といふ。今も諸流に此節付を用ふ。(忌) 三月三日松風東帯鑑 村雨 竹本座 作者 近松門左衛門 夏竹本座京都中御靈の社内に行き、秋冬は北野七の社へ行く。</p>	<p>○文彌并に門人岡本阿波大夫興行外題 三 辨大 夫 源 惣 上 人 記 盛 豐 大 師 記 大 職 冠 方 便 玉 阿 彌 陀 坊 守 屋 大 臣 日 蓮 上 人 法 難 記 中 將 姫 蓮 受 院 難 三 田 八 幡 御 傳 記 戀 塚 物 語 百 合 若 高 麗 攻 契 史 國 物 語 長 命 寺 開 帳 中 山 利 生 物 語 雁 金 文 七 善 光 寺 開 帳 照 天 姫 操 車 當 世 檢 續 日 本 紀 三 十 三 間 室 棟 由 來</p>
<p>八月 正月二日齋藤別當實盛 竹本座 作者 未詳 三月六日多田院開帳 竹本座 作者 未詳 四月八日釋迦如來誕生會 竹本座 作者 近松門左衛門 夏秋竹本座堺奈良和州所々へ行く。 十月二日鎌田兵衛名所盃 竹本座</p>	<p>○同門人表具又四郎興行外題 水 會 義 仲 羅 波 八 景 草 紙 洗 小 町 忠 臣 兵 揃</p>

<p>九月 正月八日忠信廿日正月 竹本座 作者 近松門左衛門 夏竹本座伊勢へ行く。 宇治加賀松古淨齋齋 四月十四日當麻中將姫 竹本座 作者 未詳 夏竹本座讃州より宮島へ行く。 竹本座 作者 未詳 九月九日義經追善女舞 竹本座 作者 未詳</p>	<p>○並木宗輔生る。 ○元禄十年、宇治加賀松古淨齋齋を求めて紫竹集といふ。今年六十三歳になりければ、七九集といふを、紫竹の文字に改めたり。</p>
<p>○ 二月朔日那須與市小櫻威 竹本座 作者 未詳 四月六日新板腰越狀 竹本座 作者 未詳 夏竹本座泉州堺より奈良へ行く。 竹本座 作者 近松門左衛門 七月十五日頼朝伊豆日記 竹本座 作者 近松門左衛門 十月十三日百日會我 竹本座 作者 近松門左衛門</p>	<p>○百日會我は、近松門左衛門が宇治加賀松の爲めに作れる團扇會我なり。竹本座興行の時大入にて、百日餘綴きまにより百日會我と改む。此頃は通常五六十日毎に芝居を改めたりといふ。(詳)</p>



一一

二月十四日今様小栗判官

作者 竹本座  
近松門左衛門

五月五日小野道風記

作者 竹本座  
未詳

六月五日義經東六法

作者 竹本座  
未詳

秋竹本座伏見中書島へ行き、夫より伊勢へ行く。

一二

正月二日源氏烏帽子折

二度目 竹本座  
作者 近松門左衛門

春竹本座泉州堺へ行く。

三月十一日東山殿子日遊

豊竹座  
宇治加賀古浄瑠璃

五月六日北海道虎か石

作者 錦文流  
竹本座

同 源三位履政

豊竹座  
宇治加賀古浄瑠璃

七月十五日大職冠知密玉取

豊竹座  
井上播磨古浄瑠璃

○子日遊は、豊竹若大夫の語る處、若大夫が新に操芝居を設けたるは元祿十五年なれどもかりに豊竹座と掲ぐ。

○北海道虎か石興行の時、戻子手摺といふことを仕出し、人形の道ひ標を見せ、又素語といふことをほしめ、操芝居に舞臺を付る事、此時を始とす。  
(榮大門扇敷)

秋竹本座備中宮内蘇州宮島へ行く。  
八月二十八日傾城懐子

豊竹座  
作者 紀海音(初作)

十月十三日佐々木大鑑

豊竹座  
竹本義太夫古浄瑠璃

正月六日浦島年代記

竹本座  
作者 近松門左衛門

同 長町女腹切

竹本座  
作者 近松門左衛門

四月八日淀鯉出世瀧徳

(近松世話浄瑠璃作の始)  
竹本座  
作者 近松門左衛門

夏竹本座堺奈良へ行き、秋京へ行く。  
九月九日因幡薬師傳記

竹本座  
作者 未詳

一四

○竹本義太夫受領して竹本筑後藤原博教と稱す。時に年五十一。  
五月六日蟬丸

竹本座

○豊竹若大夫、其盟の比より竹本の流儀を學び、家業はよその事にて、毎日芝居に入込み、忘る事なま。其比は竹本采女といへり。十八歳の時、筑後藤原宮に於て傾城懐子といふ上るりな語られまひ、まかつの事なく、其年暮れ、明年東立慶町芝居にて、道其屋吉左衛門、永島重太夫、其門弟數多より合ひ、素浄瑠璃の出語り、是もはらんまらす、半にて止みぬ。夫より修行の爲め、此處彼處に下り、堺、南の端にて芝居を取組み給ふ。折よし糸屋の娘、手代の久兵衛と密通あらはれ、旗をつれ万代とやらんへかけ落ち、如の井戸に身を投げ、兩人共に死せり。是等と俄かに一段浄瑠璃に作り、心中泪の玉井といふ外題を出しければ、思の外當れり。大坂に歸り、長門九郎兵衛と相座本にて、舞の芝居に掛巻、豊竹若大夫と改めはなやかなる若板堺土産心中泪の玉井と出まける。筑後方には曾根崎心中(十六年)兩家同ト標なる仕組、何れも浪花の若衆に喜ばれ、京大坂の淨るり本屋、門をならべて此の稽古本を板行せり。  
(操年代記)



<p>八月朔日神詫粟万石 作者 近松門左衛門 (義太夫受領弘めの淨瑠璃)</p> <p>九月九日 前。十二段長生鳥臺 作者 未詳</p> <p>九月九日 切。大掛物十幅對 作者 近松門左衛門</p> <p>十一月朔日曾我五人兄弟 作者 近松門左衛門</p>	<p>一五</p> <p>正月二日 前。傾城八花形 切。豐年富貴万歳 作者 近松門左衛門</p> <p>春末竹本座伊勢へ行く。 五月二十八日大磯虎稚物語 作者 近松門左衛門</p> <p>○豊竹若太夫、大坂道頓堀立慶町に新に操座を設けて興行す。 五月二十八日前。未廣十二段 豊竹座</p>
--	--

<p>切。心中涙の玉の井 作者 未詳</p> <p>七月十五日加古致心七墓巡 作者 近松門左衛門</p> <p>八月朔日 前。源子烏帽子折(近松作) 切。金屋金五郎評名額 作者 未詳</p> <p>九月九日新一心五戒魂 作者 近松門左衛門</p> <p>東岸居士 作者 未詳</p> <p>小野小町都年玉 作者 紀海音</p> <p>同 雁金女七 作者 未詳</p> <p>同 十月十五日新百人一首 作者 紀海音</p>	<p>○文七等五人の刑に處せられしは元祿十五年八月廿六日なり九月十三日より宇治源太夫座にて、難波五人男と外題して岡本文彌座と共に大入を取れり寛保二年の男作五雁金又世に鳴る享保十五年江戸の中村座歌舞伎に仕組み名月五人男と外題を掲ぐこれ又大評判。</p>
--	---



一六

正凡七日新板兵庫築島 豊竹座 作者 紀 海音

春竹本座塚より奈真へ行く。 豊竹座 作者 紀 海音

二月十五日今様殺生石 豊竹座 作者 紀 海音

春末豊竹座泉州堺へ行く。 竹本座

三月四日西明寺殿百人上臈 竹本座 作者 近松門左衛門

五月五日坂上田村麿 豊竹座 作者 紀 海音

五月七日 前。日本王代記 竹本座 作者 曾根崎心中

曾根崎心中は、近松氏世話 浄瑠璃心中物の始。四月二十三日の事實なり。

七月十五日了俊青砥刀 豊竹座 作者 紀 海音

(忠臣青砥刀)

○踏車開書往來(浄瑠璃)にいふ。豊竹座新浄瑠璃敷々差出すといへ共、竹本芝居作意宜しく浄るり外題も今に變りま正本ありといふは、皆近松門左衛門の作意也。豊竹は新物多きといへども、外題なすみなく本杯をも見當らず。漸大入せしは、井筒屋源六戀の寒暄の世話浄瑠璃。元禄十六年正月七月初日。云々

外題年鑑には、戀の寒暄を享保八年に掲ぐ。

寶永元 (二三六五)

九月十一日信田森女占 豊竹座 作者 紀 海音

十一月朔日熊谷三子盃 豊竹座 作者 未詳

正月二日増補佐々木大鑑 豊竹座 (竹本座浄瑠璃増補)

正月十五日 前。荏柄平太(作者未詳) 竹本座 作者 近松門左衛門

二月十五日 前。東大全(作者未詳) 豊竹座 作者 紀 海音

四月十六日 前。甲賀三郎 竹本座 作者 近松門左衛門

六月朔日いろは始千丈瀧 豊竹座 作者 未詳

七月二十日女長田早櫻 豊竹座 作者 未詳

○元禄十七年二月元祖市川團十郎歿。狂言の二番三番に止まりしか、四番五番續きたるは此人なり。

○元禄十七年四月十三日寶永と改元す。

一中節 京都

山本角太夫に學びたる郡一中節、元禄寶永の頃より一中節と稱して世に行はる。

○元禄九年八月小まん源五兵衛情死。

○歌舞伎狂言にお七を仕組みたるは、寶永五年二月三日江戸の中村座にて演したる、追尋彼岸櫻(作者中村清五郎)に始まる。寶永五年中村座傾城嵐會我なりとするは誤なり。寶永五年はお七の二十七回忌。

(近魂志料)

お七は、寛文八年に生れ天和三年三月廿九日、十六歳にして火刑に處せらる。

○おふさ徳兵衛の情死は寶永元年三月廿九日。







三月四日前。三井寺開帳 作者 近松門左衛門 豐竹座	切。男色加茂侍 作者 錦 同 文流	三月二十七日 前。本領曾我 切。心中二枚繪草紙 作者 近松門左衛門 竹本座	四月十二日 前。元服曾我 切。彌市梅田心中 作者 未詳 豐竹座	五月五日兼好法師物見車 作者 近松門左衛門 竹本座	六月朔日基盤太平記 同跡追物一段 作者 近松門左衛門 竹本座	六月二日聖徳太子舍利都 作者 紀海音 豐竹座
---------------------------------	-------------------------	---	---	---------------------------------	---	------------------------------

○おさん茂兵衛の牢舎申付られしは、貞享二年五月なり。

四

七月十五日曾我扇八景 作者 近松門左衛門 竹本座	七月十六日傾城千日鐘 作者 未詳 豐竹座	九月二十一日茂兵衛大經師普曆 作者 近松門左衛門 竹本座	秋豊竹座讃州より宮島へ行く。	正月二日増補富貴曾我 作者 未詳 豐竹座	正月二十日吉野忠信 作者 近松門左衛門 竹本座	二月十五日堀川波の鼓 作者 近松門左衛門 竹本座	三月三日増補日向景清 作者 未詳 豐竹座	四月二十一日 前。今川了俊 切。お兵衛卯月の紅葉 作者 近松門左衛門 竹本座
--------------------------------	----------------------------	------------------------------------	----------------	----------------------------	-------------------------------	--------------------------------	----------------------------	--



<b>五</b>	
五月五日今様女袖鑑 作者 未詳 豊竹座	六月朔日 根元曾我 作者 未詳 竹本座
六月二十四日 前 源氏十二段 切。丹波興作 待夜小室節 作者 近松門左衛門 竹本座	七月十六日頼朝七騎落 三度目 作者 近松門左衛門 豊竹座
秋豊竹座泉州堺より紀州へ行く。 九月九日酒呑童子枕言葉 作者 竹本座	十一月十八日身替問答 作者 近松門左衛門 豊竹座
正月二十日今様西行物語 作者 未詳 豊竹座	三月三日 前 新利届物語 切。杭久末の松山 作者 未詳 豊竹座

○橋屋久兵衛は貞享元年歿。  
○寶永五年、小傳馬町三丁目木下甚右衛門、土佐少掾 權正勝の正本、源氏花鳥大全を刊す。卷首に六段物 板行出来合目録を掲ぐ。(但昔八行本)  
大江山酒呑童子 源氏十二段 風流和田酒盛 なこや山三郎 鹽屋文正 現在 松風

<b>六</b>	
四月十六日 桑之助心中万年草 作者 近松門左衛門 竹本座	春竹本座奈真へ行き、伊勢へ行く。秋冬備中 宮内蘇州宮島へ行く。 作者 未詳 豊竹座
七月十五日秦始皇帝太夫松 作者 未詳 豊竹座	十月十三日山柳太夫戀慕湯 作者 紀海音 豊竹座
正月二日 前 今川制詞條目 切。清十郎五十年忌歌念佛 作者 近松門左衛門 竹本座	二月五日 前 藍染川 三度目 切。敬討難波梅 作者 未詳 豊竹座
三月三日 上巻 千日寺心中 切。源兵衛 蘆分舟 作者 未詳 竹本座	四月八日 前 新天鼓 切。源兵衛 蘆分舟 作者 未詳 竹本座

大藏冠二度玉取 新撰紅葉狩 楠 淡川  
色小町 光源氏袖鏡 津國難波物語  
當世源右衛門 さほる大臣 頼朝遊覽揃  
新道成寺定家 土佐日記 一の谷八島  
和國女眉間尺 中 將 姫 三世二河白道  
大塔宮熊野落 小野道風 遊女源平全盛鼓  
せみみ丸 周防内侍美人櫻 源氏花鳥大全  
京四條阿國歌舞 かのさり難波 萬歳頼政  
傳多露左衛門色 鏡 寛 瀧 洛 湯 森 蓬 萊 源 氏  
源氏六條通 同 頼 源 氏 集 柏 木 右 衛 門 古 今  
泰平堂三世往來 芳野たいり  
其他聲曲類纂の掲ぐるもの次の如し  
早月十二段 相生 源氏對面會我  
牧 狩 會 我 兵 揃 養 三 國 志  
平假名大全 通俗傾城三國志 續三國志  
鈴鹿山大吹丸 今川かつら 一心二河白道  
金山左衛門岩屋 京 太 耶 末 廣 昌 源 氏  
城攻 坂東安房岡立山

土佐格の歿年未詳。享保十五年木挽町に操座再興の  
由世説流談に見ゆ當時なほ生存せし。



七	
<p>夏竹本座伊勢へ行く。 作者 未詳</p> <p>六月朔日富士親王嵯峨錦 作者 紀海音</p> <p>八月二十三日笠屋三勝二十五回忌 作者 未詳</p> <p>九月九日紅葉狩 劔 本地 作者 近松門左衛門</p> <p>冬竹本座伏見中書島へ行く。 作者 近松門左衛門</p> <p>十月三日赤染衛門榮花物語 作者 近松門左衛門</p>	<p>正月二日曾我虎が石磨 作者 竹本座</p> <p>同 頼光新跡目論 作者 近松門左衛門</p> <p>正月二十三日 次郎兵衛掛鯛心中 作者 紀海音</p> <p>三月四日大原問答青葉笛 作者 近松門左衛門</p>
<p>○六年竹本執後棟直之正本古播磨風筑後丸刊 板元大坂久寶寺町三丁目四澤九左衛門。十五行本草句音節附挿畫八面。 奥書 右合二十一番之願書并馬駒摘者井上掃磨太夫從 初寶永六年春迄不殘書集加曲節令板行者也 ○三勝半七の情死は、元禄八年十二月六日の事にして、 寶永六年は其十五回忌に當れり。豊竹座にて興行せし笠屋三勝は、此事蹟を淨瑠璃に仕組し始めなり。 元文三年の豊染野中の隠井、明和九年の麗容女舞衣、皆此事件を仕組みたるなり。</p>	

正徳元 (三三七五)	
<p>三月二十日心中戀の中道 作者 近松門左衛門</p> <p>五月六日百合若大臣野守鏡 作者 未詳</p> <p>六月十六日心中又は氷の朔日 作者 近松門左衛門</p> <p>七月十四日佐與中山夜泣石 作者 未詳</p> <p>七月二十四日夕霧阿波鳴戸 作者 竹本座</p> <p>秋冬竹本座塚伏見大津へ行く。 作者 近松門左衛門</p> <p>十月十六日枕久熊谷笠 作者 未詳</p>	<p>正月九日新いろは物語 作者 竹本座</p> <p>前。本朝五翠殿 作者 近松門左衛門</p> <p>正月二十日 切。淨瑠璃古今序 作者 豊竹座</p>
<p>○寶永八年四月二十五日正徳と改元す。</p>	



作者 近松門左衛門

正月二十一日宇治加賀椽藤原好澄歿。七十七歳紀州和歌山宇治の産。姓徳田氏伊勢島宮内に學ひ、宇治嘉太夫と稱す。元來謠に巧なりしが、井上播磨の音曲を參じて、一流をなま、加賀節と稱せられ、遺風永く世に残れり。其語りたるものは百餘種に上る。大磯虎遺世記は、寛文の頃初興行に語れるものなりといふ。弟子宮松薩摩名跡を相續す。(聲)

三月五日 川冥途飛脚 竹本座

夏竹本座和泉より伊勢へ行く。 作者 近松門左衛門

四月八日 油屋お染袂の白綾 豊竹座 作者 紀海音

夏豊竹座塚へ行く。

九月九日 北國源氏金の山吹 豊竹座 作者 未詳

○加賀椽及び門弟興行外題

大磯虎遺世記 小晒物語 百人一首万年寶  
四王母 一心五戒魂 身代り問答  
大佛 今川了俊 柳本入麿  
吉備大臣 浮城寶所八坂塔 藤殿の后  
和備田 中將 元服會 時  
弓削道鏡 當流小栗列官 柏  
融通大念佛 阿部宗任東大寺 日本武尊  
小袖會 我 交通姫和光玉 三井寺狂女  
十六夜物語 夜討會 我 晴明道滿行力爭  
摩耶山開帳 小野道風願指 法隆寺閉帳  
弘徽殿城始打 源頼家輔始 神武天皇開正月  
藤原守忠度 門出入島 惟高惟仁位爭  
三社託宣由來 須磨寺背葉笛 富貴會 我  
浦島太郎七世縁 遊行上人香籠 曆(四姉作)  
蒲冠者禰始 賢女相生松 伏見常盤  
弱法師 師 徒然草(近松作) いるは物語  
天神御本地 鳥羽戀塚物語 世継會 我  
葵のの上 藍染川 凱陣八島  
東山殿子日遊 關東小六東六法 本領會 我  
辨慶京土産 平安城都還 頼朝由井流山  
念佛清十郎歌 桑原女之助 待羽中將廿三夜  
會我七いらは 遊君三世相 津月三郎往生要

二

九月十日吉野都女楠

作者 近松門左衛門

大坂作本屋八兵衛、此淨瑠璃を七行本に板行す、これ七行本の始めなり。これより前の當り淨瑠璃をも、改めて七行に再板せり。

正月六日平安城細石

作者 紀海音

三月四日 前。傾城掛物前

作者 近松門左衛門

此時若竹政太夫始めて出座し、道中双六の出語りをなす。

四月八日 前。藤戸の前陣

作者 未詳

五月五日 弘徽殿鷺羽産家

作者 近松門左衛門

源三位頼政 葛葉道心物語 主馬判官盛久 (近松作)

團扇會 我 義経懐中鏡 壽永忠則

刈草道心物語 結城七郎小袖賣 大江山

傾城反魂香 東山殿追善能 和州三部經

静法樂舞 猫寛途物語 飛彈内匠

新豐饒御祭 會我美男草 忠信廿日正月

梅花壇 巴太鼓 牛若武勇始

夜合物語 和氣清原 源氏三代記

佛舍利 源海上人 八代な形

榮花物語 五百羅漢 泉島御縁起

熊野開帳 婚禮祝言記 伊勢物語

源氏供養 秘密護摩 遊や物語

石山寺開帳 吾妻歌七枚起請 吉岡兼房染(同)

新腰越脈狀(同) 離波五人男(同) 四明寺殿行脚松

傾城委見池(同) 夕霧篋の秋(同) 富士淺間舞樂

今様いろは物語 幸崎一本松(同) 白雲壽命聖殿

梳久狂亂笠(同) 魂産靈觀音(宇) 同伊藤流流作

女人即身成佛記 傾城今四行(同) 傾城八重櫻(同)

鞍馬山師弟松 會我花欄(同) 玉黒髮七人化粧

南都御影樂(同) 念佛往生記 同。一名大原

忠臣身替物語 遊行念佛記(同) 頼朝歌(野宮)

傾城我立袖(同) 傾城富士掛(同) 龍の都連理鏡



<b>三</b>	
<p>五月十七日 前。信の源氏 豊竹座 切。新艘太夫丸 作者 未詳</p> <p>七月十五日 五百重の内姫山姥 竹本座 作者 近松門左衛門</p> <p>七月十六日 前。松浦五郎 豊竹座 切。七枚起請吾妻雛形 作者 未詳</p> <p>十一月二日 傾城吉岡染 竹本座 作者 近松門左衛門</p> <p>正月二日 河内國姥が火 竹本座 作者 松田 和吉</p> <p>二月一日 八幡太郎 東初梅 豊竹座 作者 紀 海音</p> <p>二月二十五日 天神祀 竹本座 作者 近松門左衛門</p> <p>此時彦太夫はしめて出座す。後に大和太夫と改名す。</p>	<p>伊勢御遷宮(宇) 傾城浮洲岩(同) 八幡宮和光白幡 三井寺豊半護摩 大黒天万寶御殿 南大門秋彼岸 愛宕山旭の峯 (同) 大和歌五穀色紙(同。清水三) 傾城紋日曆(同) 忠臣いろは夜討 關東小六丹前姿 野は野田若狭 富は富松薩摩 宇は宇治相模 立は立花河内</p> <p>外題年鑑には、宇治相模の部に近松の作加増曾我を掲ぐ。(翠)</p> <p>○正徳元年、紀海音の作れるお染久松秋の白紋の事實。大坂東堀油屋橋近き油屋の丁稚久松、主人の娘お染の子守りななし、お染二歳の時之れを川に墮ちて死せしむ。折檻の爲め土蔵にこめしに、久松くびれて失せぬ。これ延寶七年九月廿九日の事なり。紀音の作大群列をとり、明和四年曾我助、北堀江豊竹座の爲めに、染機機味背門松を作り安永四年近松半二、又竹本座の爲めに、お染久松新板歌祭文を作れり。何れも大當。歌舞伎に入りて種々に仕組まれ、今なほ興行せらる。</p> <p>◎正徳三年四月五日。山村座、花館愛懸樓(助六爲角の狂言)興行。第二番目、江戸牛太夫淨瑠璃。</p>

<b>四</b>	
<p>五月六日 傾城國性爺 豊竹座 作者 紀 海音</p> <p>秋豊竹座京都四條へ行く。 豊竹座 七月十五日 仁徳天皇万年車 作者 錦 文流</p> <p>七月十六日 孕常盤 竹本座 作者 近松門左衛門</p> <p>十月十二日 前。播州曾根松 豊竹座 切。傾城三度笠 (曾根崎新地芝居)</p> <p>十一月朔日 新撰大職冠 竹本座 作者 近松門左衛門</p> <p>十二月朔日 鬼鹿毛武藏鎧 豊竹座 作者 紀 海音</p> <p>四月朔日 小教盛花鞠 豊竹座 作者 未詳</p> <p>四月八日 相模入道千匹犬 竹本座 作者 近松門左衛門</p>	<p>○傾城國性爺は、正徳五年竹本座の興行に係る國性爺合戦をもとりにたるものなりと説きながら、聲曲類聚はこれを正徳三年に掲ぐ。外題年鑑又然り。甚だいぶかしけれと暫く三年の部に置く。</p>



夏豊竹座泉州塚へ行く。

七月十五日御前曾我妻富士

豊竹座

八月朔日 横笛 娥歌加留多

作者 紀 海音 竹本座

九月十日竹本筑後椽藤原博教歿。六十四歳

攝州東生郡四天王寺村の農夫なりしが、頗る淨瑠璃を好み、井上播磨椽の門人清水理兵衛に學びぬ。天賦絶倫、音聲衆に拙づ。上達して京四條河原の芝居に於て清水理太夫と稱す。井上宇治兩流の長を探り、折衷して大成し、貞享以後正徳に至る迄、凡三十四年、淨瑠璃百三十餘番を操にかけて語る。作者は大半近松門左衛門なり。娥歌加留多は其終の曲なり。遺言して若竹政太夫に名跡相續せしむ。豊竹越前少掾も此門より出でし人なり。死後門人陸奥茂太夫、竹本政太夫、同頼母、内匠

五

十月朔日 愛護若 癖箱

作者 未詳 豊竹座

十月十五日 嵯峨天皇甘露雨

作者 竹本座 近松門左衛門

正月二日 穰 靜胎内裙

作者 竹本座 近松門左衛門

春竹本座伊勢へ行く。

正月二十日 吉野忠臣錦着長

作者 未詳 豊竹座

五月五日 傾城思升屋

作者 紀 海音 同

六月二日 記録曾我玉弁齋

作者 戸川 不鱗 同

八月朔日 前。持統天皇歌軍法

作者 竹本座 竹本座

切。藤平次生玉心中

作者 近松門左衛門

◎正徳四年江戸の山村座断絶。

◎五年三月中村座坂東一齋曾我興行。此時虎屋永開淨瑠璃を語る。全年五月市村座万歳女鉢木興行。此時都一中京より下りて出勤大當り戯場年表に見ゆ。



	<p>九月十日天智天皇豊年秋 豊竹座  <small>作者 未詳</small></p> <p>十二月朔日<small>父は唐土に母は日本國性爺合戦</small> 竹本座  <small>作者 近松門左衛門</small></p> <p>三年越十七ヶ月の間興行す、古今の大入。  <small>(譜)</small>      これより前の淨瑠璃は皆短かく、間の物にのろま人形の道化、或はからくりありしが、國性爺以後此事なし。  <small>(聲。雲)</small></p>	<p>○國性爺合戦役割</p> <p>座本 竹田出雲格  <small>作者 近松門左衛門</small></p> <p>初段 竹本頼母      中 竹本頼花      切 竹本文太夫</p> <p>二段目 竹本頼母  <small>且盡し</small>      口 竹本頼母      切 竹本頼花</p> <p>三段目 口 内匠理太夫      切 竹本政太夫</p> <p>四段目 竹本文太夫  <small>進行</small>      口 竹本頼花      豊竹万太夫      竹本頼母      久仙山景季  <small>内匠理太夫</small></p> <p>五段目 竹本政太夫</p> <p>おやま人形 辰松八郎兵衛      立役人形 津山助十郎  <small>同 金七</small>      此砌多くさし込手さて一人し</p>
<p>享保元  <small>(三三六)</small></p>	<p>正月十五日薩摩太夫外肥藤原直政歿。四十五歳。  <small>(實は正月十一日大火の爲め燒死。)</small></p> <p>二月朔日鎌倉尼將軍 豊竹座  <small>作者 紀海音</small></p> <p>七月十六日花山院都 巽 同</p>	
<p>二</p>	<p>正月三日甲陽軍糧時世粧 豊竹座  <small>作者 同</small></p> <p>二月十五日<small>種は唐土國性爺後日合戦</small> 竹本座</p>	

	<p>五月十二日西行法師墨染櫻 豊竹座  <small>作者 錦文流</small></p> <p>八月二十二日<small>權三重帷子</small> 竹本座  <small>作者 近松門左衛門</small></p> <p>九月二十八日照日前都姿 豊竹座  <small>作者 未詳</small></p> <p>十一月十六日聖徳太子繪傳記 竹本座  <small>作者 近松門左衛門</small></p>	<p>○正徳六年六月廿二日享保と改元す。      ◎享保二年五月五日中村座國性爺賣船興行。      全年五月市村座傾城富士高根興行。此時江月太夫河東松の内淨瑠璃舞臺にて始て踏る大評判。  <small>(戲場年表)</small></p> <p>て遺ふが定りなり。  <small>(淨瑠璃譜)</small></p>
<p>三</p>	<p>正月二日鎌倉三代記 豊竹座  <small>作者 紀海音</small></p> <p>此時豊竹若太夫受領して、豊竹上野椽重勝と稱す。  <small>同</small>      山崎與次兵衛壽の門松 竹本座  <small>作者 近松門左衛門</small></p> <p>二月二十二日日本振袖始 竹本座</p>	



<p>七月十五日曾我會替山 作者 近松門左衛門 竹本座</p>	<p>八月初日傾城吉原雀 作者 近松門左衛門 豐竹座</p>	<p>十月十二日遊上人記 作者 未詳 竹本座</p>	<p>十月二十五日傾城酒吞童子 作者 近松門左衛門 竹本座</p>	<p>十一月五日今様賢女手習鑑 作者 同 豐竹座</p>	<p>十一月二十日博多小女郎浪枕 作者 未詳 竹本座</p>	<p>此時國太夫(宮古路豊後)始めて出座す。 作者 近松門左衛門 竹本座</p>	<p>十二月十三日善光寺御堂供養 近松 添剛 竹本座</p>	<p>正月二十日義經新高館 作者 紀 海音 豐竹座</p>
---	--	------------------------------------	---	--------------------------------------	--	--	--	---------------------------------------

國太夫節

都一中の門人宮古路國太夫(始の名都國太夫半中)一中節を繼して一流を語り出す。竹本座にて芝居を勤めしより以來國太夫節さて諸國に開ゆ。

<p>二月十四日本朝三國志 作者 竹本座 近松門左衛門</p>	<p>五月十五日神功皇后三韓實 作者 豐竹座 紀 海音</p>	<p>秋豊竹座泉州堺へ行く。 八月十二日女<small>後見</small>平家女<small>護</small>島 作者 竹本座 近松門左衛門</p>	<p>十月初日葉平昔物語 作者 豐竹座 紀 海音</p>	<p>十月十一日頼政歌道扇 作者 野田 若狭座 清水三郎兵衛</p>	<p>十一月六日島原蛙合戦 作者 竹本座 近松門左衛門</p>	<p>大和太夫出語をなす。ツレ國太夫、三絃鶴澤友二郎。</p>	<p>今年、竹本喜世太夫曾根崎芝居に於て、次の淨瑠璃操芝居を興行す。</p>
---	---	--	--------------------------------------	--	---	---------------------------------	--

○享保四年十一月、本屋又七といふもの、品川宿の町人を翻らひ、御殿山の上り口に芝居を立て、辰松八郎兵衛といふ名題にて捲き上ぐ。同十八日より三日興行せし時、高貴の方御覽あるべしとの仰せにて、江戸半太夫が堺町の座を借受け辰松座と改めたり。辰松は有名なる人形遣ひなり。(整)



<p>龍宮東門阿波の鳴門 熊野現権鳥の午王</p> <p>作者 未詳</p>	<p>五</p> <p>正月二日國性爺合戦 二度目 竹本座 同 鎮西八郎唐土船 豐竹座</p> <p>三月三日井筒河内通 竹本座 作者 近松門左衛門</p> <p>竹本頼母出語り、ツレ澤太夫、三紗友二郎。</p> <p>六月三日富仁親王嵯峨錦 二度目 豐竹座 八月三日雙生隅田川 竹本座 作者 近松門左衛門</p> <p>九月二十一日 前。日本傾城始 豐竹座 切。山樹太夫腹原雀 作者 紀海音</p> <p>十一月四日日本武尊吾妻鑑 竹本座 作者 近松門左衛門</p> <p>十二月六日治兵衛心中天網島 竹本座 作者 同</p>
<p>〔享保五年の冬、近松翁住吉新家の酒樓に遊びて在し時、俄に大坂より芝居者來り、昨夜網島の大長寺に</p>	

<p>六</p> <p>正月二十日三輪丹前能 豐竹座 作者 紀海音</p> <p>二月十七日攝津國夫婦池 竹本座 作者 近松門左衛門</p> <p>五月十六日伏見常盤普物語 豐竹座 作者 同</p> <p>七月十五日女殺油、地獄 竹本座 作者 近松門左衛門</p> <p>八月三日信州川中島合戦 同 作者 同</p> <p>此時山籠を張ぬきの本山に作り始む。 従前山の段は籠に山を畫きたるを用ゐしなり。 九月十一日吳越軍談比翼臺 豐竹座 作者 紀海音</p>	<p>七</p> <p>正月二日唐土斷今國性爺 竹本座 作者 近松門左衛門</p> <p>同 大友王子玉座靴 豐竹座</p>
<p>男女の情死あり、何卒速に大坂へ歸り、淨瑠璃に作りたまはらば一日の稽古にして、明後日より興行せんと、只管に頼み入りければ、早駕に乘りて大坂へ歸り、駕より下りて其儘に筆なとり、云々 (翁草)</p> <p>◎六年森田座天網島興行。</p> <p>◎七年春江月中村座大體面會我興行の時。 神樂 獅子 江月 河東</p>	



<b>八</b>	
<p>三月三日浦島年代記 二度目 作者 紀 海音 竹本座</p> <p>四月六日心中二腹帯 作者 紀 海音 竹本座</p> <p>四月二十二日心中宵庚申 作者 近松門左衛門 竹本座</p> <p>九月一日<small>祇王</small>佛御前扇車 作者 松田 和吉 同</p> <p>十一月一日東山殿室町合戦 作者 紀 海音 豊竹座</p> <p>正月二十日玄宗皇帝蓬萊鶴 作者 同 同</p> <p>上野様出陣 作者 竹田 出雲 竹本座</p> <p>二月十七日大塔宮<small>おんたかみや</small>職<small>しやく</small>鏡 作者 松田 和吉 竹本座</p> <p>五月六日記録會我 作者 近松門左衛門添剛 豊竹座</p>	<p>○お千代半兵衛の情死は四月五日宵庚申の夜六日の朝の事なり同日豊竹座心中二腹帯と外題を掲げてこれを任組み八日より興行せり同月廿二日竹本座又心中宵庚申を出す同年八月中村座これを任組みて花毛毬二腹帯と外題を掲げて興行せり。 (戯場年表)</p> <p>◎八年春中村座 水揚蝶の羽つかひ 江戸 河東</p>

<b>九</b>	
<p>七月傾城無間鐘 作者 戸川 不鱗 豊竹座</p> <p>九月元祖都一中京都に歿す。 作者 紀 海音</p> <p>(音曲系諸書國著) 一中は、京都本願寺某院の所化。二十歳の時還俗して、山本土佐岡本文彌に學ひて、後一流を立て須賀千朴と稱す。後都太夫一中と改め、五十歳の時剃髮して又千翁と改む。門人に秀太夫千中、(江戸に下りて名を擧ぐ)國太夫半中(宮古路豊後様)等の名人あり。</p> <p>十一月三日<small>日本</small>建仁寺供養 作者 西澤 一風 豊竹座</p> <p>十一月二十四日<small>お吉</small>櫻町名花管 作者 田中 千柳 竹本座</p> <p>正月十五日<small>將軍太郎其門</small>出羽冠者頼平關八州警馬 作者 竹田 出雲 竹本座</p>	<p>○都一中山本、土佐の座にて暗りたる外題。 傳授 小町 万屋助六心中 梳久末の松山 菜種の花盛 幸時<small>の</small>瓜枕 彦三近江八景 愛染明王彫向 川原の心中 附。おまゆん傳兵衛の心中は正徳元年六月廿二日。</p> <p>○今昔操年代記(四澤一風著)には、建仁寺供養の作者を村上嘉介とせり従ふ可き。</p>



二月朔日頼政退善芝  
作者 近松門左衛門  
豐竹座

作者 西澤 一風  
田中 千柳

三月二十一日大坂大火。古來よりの正本板木  
多く焼失す。豊竹座類焼。南都堺の芝居へ  
行き、又曾根崎新地へ行く。秋伊勢古市に  
向ひ、九月下旬歸坂。竹本座又類焼す。四  
月八日より假芝居にて興行。

七月十五日三國志大全鼎軍談  
勝安孔明 竹本座

十月十六日女蟬丸  
作者 竹田 出雲  
豐竹座

十一月四日右大將鎌倉實記  
作者 西澤 一風  
田中 千柳  
竹本座

十一月二十二日近松門左衛門歿。七十二歳  
門左衛門信盛號を平安堂、巢林子、不

正月二日昔米万石通

三月三日南北軍問答

作者 西澤 一風  
田中 千柳  
豐竹座  
作者 同

移山人、等と稱す。長州萩の産。相森  
某の男。少時肥前唐松寺に遊學す。後  
上京仕官して爵六位に叙る。元祿の比、  
退きて近松門左衛門といふ。都万大夫  
(歌舞伎)の爲めに作して好評を博す。  
井上播磨、宇治加賀の爲めにも淨瑠璃  
を作れり。元祿三年浪花に下り、爾來專  
ら義太夫の爲めに作れるもの數十曲。  
素より和漢の書に通し、佛典にも乘し  
て、時を察し、巧に人情を穿ちしかば、  
其作る處何れも世に持囃さる。國性爺  
合戦、雪女五枚羽子板、曾我會馨山、は  
其三傑作として傳へらるれども、寧ろ  
其世話物に勝れたるもの多しと云ふ。



<p>五月六日 美丈御前<small>みぢのり</small>身替弦張月 作者 西澤 一風</p>	<p>○十年近松半二生る。</p>
<p>五月九日 出世握虎稚物語 作者 田中 千柳</p>	
<p>六月十五日 復<small>たまたま</small>鳥羽懸塚<small>たづな</small>(既出) 作者 竹田 出雲</p>	
<p>七月二十日 十河見河東殿<small>とがみ</small>。四十二歳 作者 近松門左衛門</p>	
<p>品川の豪家天満屋藤左衛門の男、藤十郎といひ河東といふ。嬉遊を事とし、産を破り江戸半太夫の門に入りて、其の節を和げ手品節と式部節とを交へて一流をなし出意の譽高し。門人夕丈に家を嗣かしめ、河東の名は河丈に與ふ。河東は、享保年間歌舞伎芝居へ出で所作に合せて語りしこと屢なれども、皆籠の内にて、出語りは一度もせざりきぬ。</p>	
<p>九月十八日 大内裏大友真鳥 竹本座</p>	

<p>○十月二日 大佛殿万代<small>まんげ</small>礎 作者 竹田 出雲 豊竹座</p> <p>冬豊竹座京へ行き鎌倉三代配を興行す。 本年の暮、豊竹島太夫江戸に下る。これより先竹本國太夫も江戸に下れり。相共に興行すること約二年。</p>	<p>○十一年、中村座大佛殿會我興行の時、江戸河東殿のたゞみ讀を語る。</p>
<p>一月朔日 曾我錦几帳 作者 安田 蛙文 豊竹座</p>	<p>初段 大序 豊竹上野少掾 中 豊竹新太夫 切 豊竹源太夫</p>
<p>四月八日 北條時頼記 同</p>	<p>二段目 口 豊竹喜代太夫 切 豊竹出水太夫</p>
<p>切に雪の段出語り、太夫豊竹上野掾、ワキ和泉太夫。 六月竹本座南都へ行く。 九月十一日 伊勢平氏年々鑑 作者 竹田 出雲</p>	<p>三段目 道行<small>みちゆき</small> 豊竹源太夫 切 豊竹喜代太夫 豊竹上野少掾</p>



一一

正月十五日 敵討未刻の太鼓

作者 竹本座  
長谷川千四

二月十五日 清和源氏十五段

作者 並木宗助  
安田蛙文

四月十八日 小野炭焼七小町  
深草土器師

作者 竹田出雲  
竹本座

八月朔日 三班太夫五人娘

作者 竹田出雲  
竹本座

八月十五日 攝津國長柄人柱

作者 並木宗助  
安田蛙文

切に青菊、出簀、太夫豊竹上野少椽、ワキ和泉太夫、人形藤井小三郎、三味線野澤喜八郎。

一二

二月初日 尊氏將軍二代鑑

作者 並木宗助(慶)  
竹本座

三月廿二日 工藤左衛門富士日記

竹本座

口 豊竹泉太夫  
四段目 しつと段 豊竹出水太夫  
中々同 新太夫  
切 同 出水太夫

五段目 豊の段出語り出遣ひ  
太夫 豊竹上野少椽  
ワキ 豊竹出水太夫  
三絃 野澤喜八

人形出遣ひ 藤井小八郎  
同 小三郎  
豊松藤五郎  
中村彦三郎  
此浄瑠璃古今の大入。  
(浄瑠璃贈)

○十三年春

酒中花 中村座  
江戸節浄瑠璃

一四

六月廿一日 河東蘭洲歿。

此時正面の床を始めて横に直す。

五月廿三日 加賀國篠原合戦

作者 竹田出雲  
長谷川千四

五月十五日 南都十三鐘

作者 竹田出雲  
並木宗助  
安田蛙文

正月二日後 三年奥州軍記

作者 並木宗助  
安田蛙文

二月十五日 尼御臺由井演出

作者 竹田出雲  
長谷川千四

六月十八日 大塔宮職録 二度目

竹本座

八月朔日 眉間尺象賀

竹本座

○十四年 平賀源内。烏亭為馬生る。  
○十四年春 中村座にて扇恵方曾我興行の時、大薩摩主膳太夫浄瑠璃を語る。爾來家の藝さなる。



一五	<p>九十兩月竹本座京都へ行く。  <small>作者</small> 竹田 出雲  <small>長谷川千四</small></p> <p>九月十日藤原秀卿倭系圖  <small>豊竹座</small></p> <p>切に出語  <small>作者</small> 並木 宗助  <small>安田 蛙文</small></p> <p>閏九月十九日竹田近江歿。八十一歳 (忌)  <small>かちくり人形を遺ひたる初代竹田出雲      様なり。享保十一年五月五日近江と改      名す。竹本座の座元となりし出雲様は      二代目なり。</small></p> <p>十一月廿五日京土産名所并筒  <small>竹本座</small>  <small>作者</small> 長谷川千四</p>
<p>○十五年 並木正三生る。  <small>○宗助と宗輔とは同人なり享保初年の正本には多く宗      助とあり</small></p>	

一六	<p>春宮古路國太夫(豊後様)江戸に下り、葺屋町      川岸小芝居へ出勤す。豊後節の祖なり。  <small>(忌)</small></p> <p>五月六日本朝檀特山  <small>豊竹座</small>  <small>作者</small> 並木 宗輔</p> <p>切に出語  <small>作者</small> 安田 蛙文</p> <p>八月朔日信州縋捨山  <small>竹本座</small>  <small>作者</small> 長谷川千四</p> <p>同 楠正成軍法實録  <small>豊竹座</small>  <small>作者</small> 並木 宗輔</p> <p>此時近元九八。和田七の人形に眼の動      く事を工夫す。  <small>十一月十五日須磨都源平躰圖</small>  <small>竹本座</small>  <small>作者</small> 文 耕 堂</p> <p>正月二日前太平記源家七代集  <small>豊竹座</small></p>
<p>○十五年十一月廿二日土佐様正勝木挽町六丁目に操歴      を免さる。  <small>世説海談三十三に十五年十二月二十八日土佐様      正勝芝居再興來春四月朔日を初日の酒吞童子は年      來久しく中絶せし後なれば非常の大入。      (劇場年表)</small></p>	



<p>切に出語 四月二日和泉國浮名溜池 作者 並木宗輔 安田蛙文</p> <p>五月五日國性爺合戦 三度目 作者 並木宗輔 安田蛙文</p> <p>五月廿四日西澤一風夜。六十七歳 通稱正本屋九右(左カ)衛門、大坂心齋橋南四丁目の書林板元なり。豊竹座の戯曲作者となる。別に今昔操年代記の著あり。</p> <p>六月朔日酒呑童子枕言葉 作者 豊竹座 近松門左衛門</p> <p>九月十日鬼一法眼三略卷 作者 文耕堂 長谷川千四</p> <p>九月三十日豊竹上野少椽、再び受領して越前少椽藤原重泰と稱す。 (外) 淨瑠璃譜に廿日とあり、淨瑠璃大系圖</p>	<p>◎十六年春中村座傾城福引名護屋興行の時、竹田のからくり人形に習ひて立まばりの内に肌脱になることを工夫す。今の引ぬき此時に始まる。</p>
---	---

一七

<p>には十月と見ゆ。 十月十六日赤澤山伊東傳記 作者 豊竹座 並木宗輔 安田蛙文</p> <p>正月廿日八百屋お七戀緋櫻 作者 同 紀海音</p> <p>四月初日増補用明天皇 作者 文耕堂 長谷川千四</p> <p>五月七日今様反魂香 (今様傾城反魂香) 作者 並木宗輔 安田蛙文</p> <p>六月八日伊達染手綱 作者 竹本座 近松門左衛門</p> <p>九月九日壇浦兜軍記 作者 文耕堂 長谷川千四</p> <p>九月十日待賢門夜軍 作者 豊竹座 並木宗輔</p>	<p>◎十七年春市村座松竹梅根元會我(お七五十四回忌)興行吉祥の處宮古路豊後後椽始めての出動にて大當。</p>
---	---



一八	
<p>十二月十二日<small>（まへかひり）</small>前内裏島王城遷<small>（つづし）</small> 伊藤出羽掾座 作者 安田 蛙文</p> <p>二月朔日大内裏大友真鳥 二度目 竹本座 前 吉野忠信 二月二日 切。お初天神記 豊竹座 切に豊竹越前少椽出語。</p> <p>三月十二日竹本大和大夫歿。 竹本座</p> <p>四月八日<small>（太平記）</small>住吉巻車返合戦櫻 作者 文 耕 堂</p> <p>此時大森彦七の木偶に指先の動くことを仕始む。</p> <p>四月十五日鎌倉比事青砥錢 豊竹座 作者 安田 蛙文</p> <p>六月三十日竹本座類焼假芝居にて興行す。</p> <p>七月十六日<small>（上）</small>莠冷人吾妻雛形 同</p> <p>作者 並木 宗輔</p>	<p>十二月十二日<small>（まへかひり）</small>前内裏島王城遷<small>（つづし）</small> 伊藤出羽掾座 作者 安田 蛙文</p> <p>二月朔日大内裏大友真鳥 二度目 竹本座 前 吉野忠信 二月二日 切。お初天神記 豊竹座 切に豊竹越前少椽出語。</p> <p>三月十二日竹本大和大夫歿。 竹本座</p> <p>四月八日<small>（太平記）</small>住吉巻車返合戦櫻 作者 文 耕 堂</p> <p>此時大森彦七の木偶に指先の動くことを仕始む。</p> <p>四月十五日鎌倉比事青砥錢 豊竹座 作者 安田 蛙文</p> <p>六月三十日竹本座類焼假芝居にて興行す。</p> <p>七月十六日<small>（上）</small>莠冷人吾妻雛形 同</p> <p>作者 並木 宗輔</p>

一九

一九	
<p>十月朔日<small>（ちつしん）</small>忠臣金短冊 同 並木 丈輔</p> <p>十一月十五日<small>（松久）</small>元日<small>（松山）</small>金年越 竹本座 作者 文 耕 堂</p> <p>正月二日北條時頼記 二度目 豊竹座 此時正面の床を横に直す。</p> <p>二月朔日應神天皇八白幡 竹本座 作者 文 耕 堂</p> <p>竹本政太夫義太夫と改名す。</p> <p>三月五日二代目河東歿。</p> <p>初名河丈。吉原大門外下駄屋庄右衛門。</p> <p>六月朔日曾我昔見臺 豊竹座 作者 並木 宗輔</p> <p>六月八日<small>（井筒）</small>河内通 二度目 竹本座 作者 並木 丈輔</p>	<p>十月朔日<small>（ちつしん）</small>忠臣金短冊 同 並木 丈輔</p> <p>十一月十五日<small>（松久）</small>元日<small>（松山）</small>金年越 竹本座 作者 文 耕 堂</p> <p>正月二日北條時頼記 二度目 豊竹座 此時正面の床を横に直す。</p> <p>二月朔日應神天皇八白幡 竹本座 作者 文 耕 堂</p> <p>竹本政太夫義太夫と改名す。</p> <p>三月五日二代目河東歿。</p> <p>初名河丈。吉原大門外下駄屋庄右衛門。</p> <p>六月朔日曾我昔見臺 豊竹座 作者 並木 宗輔</p> <p>六月八日<small>（井筒）</small>河内通 二度目 竹本座 作者 並木 丈輔</p>

○享保廿年。中村座銀櫻故郷錦（忠臣金短冊の改作）興行。

◎十九年春

夕霧浅間嶽 中村座  
都秀太夫千中  
風流相生獅子 ヲキ  
都金太夫三中

豊後節 江戸

享保十九年堺町中村座に於て、宮古路豊後後巻をなしてより、世の入宮路節又豊後節と稱して世に行はる。



<p>110</p>	<p>八月十三日那須與市西海硯        豐竹座 作者 並木 宗輔</p> <p>十月五日蘆屋道滿大内鑑        竹本座 作者 竹田 出雲</p> <p>此時與勘平彌勘平の人形は左足を外人に遣はせ、殊に與勘平の人形は腹のふくる、様にせり、これを操三人懸りの始とす。        (外。譜)</p> <p>十一月 竹田近江の悴三四郎近江を受領す。        (忌)</p> <p>○豊竹新太夫(肥前様)江戸に下り、若松丹後様の名代を以て芝居を興行す、萱屋町の辰松八郎兵衛の座をも兼ねぬ。</p>	<p>○元文二年中村座蘆屋道滿大内鑑興行。        寶曆九年秋市村座蘆屋道滿大内鑑興行。</p> <p>◎二十年春        市村座        尺八初音の寶船        江戸太夫藤十郎</p>
------------	--	---

<p>元文元        (二四〇六)</p>	<p>二月朔日赤松回心縁陣幕        竹本座 作者 文 耕 堂</p> <p>八月十五日新葦桑門筑紫縁        豐竹座 作者 並木 宗輔</p> <p>此時播磨屋彌三郎豊竹駒太夫と改名して始めて出座す。</p> <p>九月十四日甲賀三郎寤物睡        竹本座 作者 竹田 出雲</p> <p>十一月 二代義太夫受領して、竹本上總少様藤原喜教といふ。</p> <p>三月四日和田合戦女舞鶴        豐竹座 作者 並木 宗輔</p> <p>五月十二日敵討権櫻錦        竹本座 作者 文 耕 堂</p> <p>此時人形に眉の動く事を工夫す。</p>	<p>○享保廿一年四月廿八日元文と改元す。</p> <p>◎廿一年春        中村座        家模傾城姿        都 千 中        明烏口舌の枕        江戸太夫双笠</p> <p>◎元年正月市村座寶船鑑額所興行の時。        小夜中山浅間殿 宮古路文字太夫        これ常盤津の狂言へ出でし始なり淨瑠璃中途にて奉行より差止らる。</p>
------------------------------	---	---



	<p>十月十三日猿丸太夫鹿卷巻<small>しかのまきまき</small> 作者 三好 松洛 竹本座 文 耕 堂 三好 松洛</p>	<p>◎中村座國宮殺生石興行の時、薩摩平太夫淨瑠璃を語る。</p>
二	<p>正月十五日安倍宗任松浦登<small>あべのむねとくにまつら</small> 作者 並木 宗輔 豊竹座 正月廿八日御所櫻堀川夜討<small>ごすけいりやま</small> 作者 竹本座 文 耕 堂 三好 松洛</p> <p>竹本上總様播磨少様と改む。 七月廿一日釜淵双級巴<small>かまがしちゆうふたごしら</small> 作者 並木 宗輔 豊竹座 同 蟬丸 二度目 十月十日太政入道兵庫岬 作者 竹田小出雲 竹本座 竹田 庄藏</p>	<p>◎二年春中村座國舞會我興行の時、江戸太夫淨瑠璃を語る。 同 春市村座今昔御會我興行の時、品定間垣<small>しなぢまがき</small>錦 江戸太夫藤十郎 結<small>むす</small>登<small>のぼ</small>翠<small>すず</small>翠<small>すず</small>の柳 江戸太夫双笠</p>
三	<p>正月二日傾城無間鐘 二度目 豊竹座 正月廿五日行平磯馴松<small>ゆきひらいそなると</small> 竹本座</p>	<p>◎安永二年市村座御所櫻堀川夜討興行。</p>

	<p>四月八日丹生山田青海劍<small>にぶのやまたにせうのつるぎ</small> 作者 竹田 正藏 三好 松洛 豊竹座 七月十五日忠臣いろは夜討 京都東芝居 作者 宇治加賀様 竹本座 八月十九日小栗判官車街道 作者 千 前 軒 文 耕 堂 十月八日茜染野中の隠井 作者 並木宗輔添剛 原田由良助 豊竹座</p>	<p>◎三年河原崎座 胡蝶の夢 常盤津小文字太夫初出勤(宮本の題)</p>
四	<p>二月初日奥州秀衡有髮<small>うすのへ</small> 豊竹座 四月十一日平假名盛衰記 作者 並木 宗輔 竹本座 文 耕 堂</p>	<p>◎平假名盛衰記役割 初段 大序 竹本播磨少様 中 竹本文太夫 切 竹本此太夫</p>



五	
<p>五月六日建仁寺供養 二度目 八月十五日狹夜衣鶯鷺劍翅 九月廿一日豊後節禁せらる。</p> <p>作者 並木 宗輔</p>	<p>五月六日建仁寺供養 二度目 八月十五日狹夜衣鶯鷺劍翅 九月廿一日豊後節禁せらる。</p> <p>作者 並木 宗輔</p>
<p>二月六日 鶴山姫捨松 四月十日 本田善光日本鑑 四月十一日 今川本領猫魔館</p> <p>作者 同 作者 爲永太郎兵衛 作者 爲永太郎兵衛</p>	<p>二月六日 鶴山姫捨松 四月十日 本田善光日本鑑 四月十一日 今川本領猫魔館</p> <p>作者 同 作者 爲永太郎兵衛 作者 爲永太郎兵衛</p>
<p>三好松洛 淺田可啓 竹田小出雲 千前軒</p>	<p>三好松洛 淺田可啓 竹田小出雲 千前軒</p>
<p>◎寶曆三年春市村座ひらかな盛衰記興行。</p>	
<p>二段目 中口 切</p> <p>竹本内匠太夫 竹本百合太夫 竹本播磨少枝</p>	<p>二段目 中口 切</p> <p>竹本内匠太夫 竹本百合太夫 竹本播磨少枝</p>
<p>三段目 中口 切</p> <p>竹本内匠太夫 竹本島太夫 竹本此太夫 竹本播磨少枝</p>	<p>三段目 中口 切</p> <p>竹本内匠太夫 竹本島太夫 竹本此太夫 竹本播磨少枝</p>
<p>四段目 中口 切</p> <p>竹本百合太夫 竹本内匠太夫 竹本播磨少枝</p>	<p>四段目 中口 切</p> <p>竹本百合太夫 竹本内匠太夫 竹本播磨少枝</p>
<p>五段目 竹本文太夫</p>	<p>五段目 竹本文太夫</p>

寛保元 (二四〇三)	
<p>七月朔日將門冠合戦</p> <p>竹本座</p> <p>文 耕 堂</p> <p>三好松洛 淺田可啓 竹田小出雲 千前軒</p>	<p>七月朔日將門冠合戦</p> <p>竹本座</p> <p>文 耕 堂</p> <p>三好松洛 淺田可啓 竹田小出雲 千前軒</p>
<p>九月十日 武烈天皇 藏</p> <p>作者 爲永太郎兵衛</p> <p>此時佐手彦の人形に眉毛の動くことを仕はしむ。</p> <p>前。百日曾我 十一月十一日 切。戀八卦柱曆(大經師) 竹本座</p> <p>近松門左衛門十年回忌追善</p>	<p>九月十日 武烈天皇 藏</p> <p>作者 爲永太郎兵衛</p> <p>此時佐手彦の人形に眉毛の動くことを仕はしむ。</p> <p>前。百日曾我 十一月十一日 切。戀八卦柱曆(大經師) 竹本座</p> <p>近松門左衛門十年回忌追善</p>
<p>正月十四日伊豆院宣源氏鑑</p> <p>同</p> <p>文 耕 堂</p> <p>三好松洛 小川半平</p>	<p>正月十四日伊豆院宣源氏鑑</p> <p>同</p> <p>文 耕 堂</p> <p>三好松洛 小川半平</p>
<p>◎元文八年三月三日寛保と改元す。</p>	



<p>三月四日 日本朝斑女装 竹田小出雲、千前軒 作者 豊竹座</p>	<p>三月より九月迄、大坂竹田近江大塚江戸に下りて、堺町勘三郎芝居の向にてカラクリ及び小供狂言をなす。 (我衣) 五月十六日 新蒲雪物語 竹本座</p>	<p>五月廿一日 青梅擇食盛 作者 文耕堂 三好松洛 小川半平 竹田小出雲 豊竹座</p>	<p>七月十五日 播州皿屋敷 (心中二つ腹帯と同物) 同 九月十日 田村麿鈴鹿合戦 作者 爲永太郎兵衛 浅田一鳥 同</p>
<p>○延享三年五月中村座新蒲雪物語興行。</p>			

<p>冬、豊竹越前少掾豊竹駒太夫、三味線竹澤東四郎、人形若竹東九郎、作者並木宗輔、筆者龜喜、等六人江戸に下り翌春より肥前座に於て興行す。 作者 浅田一鳥 豊田正藏</p>	<p>正月二日 田村麿鈴鹿合戦 肥前座 二月十四日 幼稚三之介花衣いろは縁起 竹本座 三好松洛 作者 竹田小出雲 三月三日 股野流石打 石橋山鏡 肥前座 作者 爲永太郎兵衛 並木宗輔 同 日百合稚高麗軍記 豊竹座 作者 爲永太郎兵衛 浅田一鳥 文者 並木宗輔 竹本座</p>	<p>四月十七日 室町千疊敷(津國夫婦池) 竹本座</p>
<p>◎二年正月十六日大坂に於て鳴神不動北山櫻興行。鳴神上人、海老蔵 ◎二年春 夜の編笠 中村座 江戸河東 大評判</p>		



七月二日男作五雁金

竹本座

八月越前少椽等江戸より大坂へ歸る。

作者 竹田 出雲

八月十一日道成寺現在蛇鱗

豊竹座

作者 浅田 一鳥

九月二日二代竹田近江歿。

(忌)

十月二日鎌倉大系圖

豊竹座

作者 爲永太郎兵衛

文者 浅田 一鳥

爲永千椽

十月四日紀海音寂。

覆並氏貞峨と號す。俗稱喜左衛門、後善八と改む。俳歌師貞因の次男にして、有名なる油煙齋貞柳の弟なり。黄檗宗を信し、一度和州柿本寺の僧となりしが、歸俗して大坂に住し醫を業とす。契沖の門に入りて歌を學び、元文元年

三

春豊竹座南都へ行く。

三月四日風俗太平記

豊竹座

爲永太郎兵衛

作者 浅田 一鳥

豊岡 珍平

小川 牛平

竹本座

四月六日入鹿大臣鳥都評

四月 二世竹田近江椽の弟、平助京都に於て近江と受領す。

五月十八日丹州爺打栗

竹本座

作者 竹田 出雲

作者 竹田 小出雲

八月朔日久米、仙人吉野櫻

豊竹座

◎三年

中村座 大薩摩主膳大夫 若大夫等

○寛政九年都座爺打栗興行。



十月廿五日大内裏大友真鳥 三度目 竹本座  
ごこば政太夫はじめて出座す。

延享元

(二四〇四  
二四〇七)

三月六日見源氏道中軍記

竹本座 竹田 出雲

三月義經新合狀

作者 竹田小出雲  
三好 松洛  
肥前座

(南蠻鏡後藤目貫の改作) 作者 未詳  
四月二日小袖編に吉三の文字 潤色 江戸紫  
風流類のお七の物好

豊竹座

爲永太郎兵衛

作者 淺田一鳥  
豊岡 珍平  
但見 仙鶴

七月廿五日竹本播磨少様藤原喜效歿。五十四  
歳

竹本筑後様の門人、始の名は中紅屋長  
四郎、はしめ聲低しとて、師より芝居

寛保四年二月廿一日延享と改元す

◎元年春

百千鳥道成寺

中村座  
宮古路文字大夫  
宮古路加賀大夫

を許されず、豊竹若太夫の許に歸る。  
後計らず筑後様に感ぜられ呼び返され  
て苗字を嗣ぎ、遺言によりて名跡を相  
續す。受領して上總様といひ、後又播磨  
少様と改む。其語る處深く人情を穿つ。  
聽く者感して淨瑠璃の中興となす。一  
世政太夫これなり。

九月十日柿本紀僧正旭車

豊竹座 爲永太郎兵衛

作者 淺田一鳥  
豊岡 珍平  
但見 仙鶴

十一月十六日平假名盛衰記 二度目

竹本座

切に播磨様追善

八曲鏡掛繪

出語 此太夫、政太夫、  
百合太夫、柚太夫、  
錦太夫、島太夫、紋  
太夫、三味線鶴澤



十二月初日遊君衣紋鑑

友二郎、同平五郎、  
豊竹座  
爲永太郎兵衛  
浅田一鳥  
豊岡珍平  
但見仙鶴

正月十二日三軍桔梗原

明石越後座  
櫻井 頼母  
文 瀾 堂

二月初日 詩 近江八景

爲永太郎兵衛  
豊竹座  
浅田一鳥  
豊岡珍平  
但見仙鶴

二月十三日軍法富士見西行

並木 千柳  
作者 三好 松洛  
竹田小出雲  
明石越後座

四月三日延喜帝秘曲琵琶

○明石越後座は、始め竹本森太夫といふ。播磨が門人なり。延享の頃より、曾根崎芝居にて興行す。寛政の始めに断絶す。江戸へも下りたることありといふ。(聲)

五月四日増補大佛殿万代礎

作者 紀 甘谷  
豊竹座  
浅田一鳥  
増補者 豊岡 珍平

七月十六日 圓七九郎兵衛夏祭浪花鑑

竹本座  
並木 千柳  
作者 三好 松洛  
竹田小出雲

七月廿一日三代目河東菘

此時人形に帷子の衣裳を着せ始む。

初名河洲。下谷茅町菓子屋宇平治。後

吉原揚屋町住。

八月五日浦島太郎倭物語

豊竹座  
作者 爲永太郎兵衛  
浅田一鳥  
文者 豊岡 珍平  
爲永 千鶴

◎夏祭浪花鑑役割

(九册物)

- 一册目 竹本此太夫
- 竹本百合太夫
- 竹本柳太夫
- 竹本其太夫
- 二册目 竹本紋太夫
- 三册目 竹本錦太夫
- 四册目 竹本秋太夫
- 竹本紋太夫
- 竹本柳太夫
- 竹本百合太夫
- 竹本島太夫
- 竹本政太夫
- 竹本錦太夫
- 竹本此太夫
- 竹本島太夫
- 竹本太夫
- 竹本太夫
- 九册目 竹本太夫

此頃、操流して、歌舞伎はなきが如し。芝居表は數百本の帳、遺物等數を知らず。



<p>十一月三日北條時頼記 三度目 豊竹座</p> <p>切雪の段出語 太夫元越前少椽一世一代(六十五歳) ワキ内匠太夫、三味線野澤喜八郎、人形藤井小八郎、同小三郎、若竹藤九郎。</p> <p>閏十二月朔日唐金茂右衛門東鑑</p> <p>作者 豊竹小和泉座</p> <p>櫻井 頼母</p> <p>並木 和助</p>	<p>正月十四日補音嘶</p> <p>竹本座</p> <p>並木 千柳</p> <p>作者 竹田小出雲</p> <p>三好 松洛</p> <p>五月四日播磨椽三回忌筑後椽卅三回忌</p> <p>竹本座</p> <p>佛御前扇車</p> <p>心中重井筒</p> <p>出語出遣ひ</p> <p>五月六日酒香童子出生記</p> <p>豊竹座</p>
<p>○三年二月廿九日、築地本願寺脇より出火して、外記座肥前座土佐座何れも類焼す。九月に肥前座の立ちたるのみにて、其他再興せず。大坂より来りし義太夫節の操座ひざり行はれ、此頃より次第に江戸表にも新作淨瑠璃現はれて、義太夫節は愈々世に弘まれり。</p> <p>○豊竹小和泉太夫は、陸奥茨城太夫の弟子なり。始、和佐太夫。道頓堀芝居に於て、延享より寶暦の始迄興行す。</p> <p>寛政竹、四竹本と相模の如く、東西に別れ、町中近國ひきをなし、操の繁昌いはん方なし。(譜)</p>	

三

<p>秋豊竹越前少椽堺へ行き一世一代を勤む。</p> <p>八月初日歌枕棗棠花合戦</p> <p>作者 梁 座 軒</p> <p>陸竹小和泉座</p> <p>春 草 堂</p> <p>並木 和助</p> <p>竹本座</p> <p>八月廿一日菅原傳授手習鑑</p> <p>竹田 出雲</p> <p>並木 千柳</p> <p>三好 松洛</p> <p>竹田小出雲</p>	<p>十月廿五日迄六十五日間大入</p> <p>十月廿一日 浮名齋染 女舞 劔 紅楓</p> <p>十一月十七日 月水鏡梅 花筏 巖流島</p> <p>作者 春 草 堂</p> <p>豊竹座</p> <p>淺田 一鳥</p> <p>但見彌四郎</p> <p>松屋 來輔</p>																																	
<p>○菅原傳授手習鑑役割</p> <table border="1"> <tr> <td>初段</td> <td>大序</td> <td>竹本此太夫</td> </tr> <tr> <td>中</td> <td>竹本百合太夫</td> <td>竹本此太夫</td> </tr> <tr> <td>切</td> <td>竹本錦太夫</td> <td>竹本錦太夫</td> </tr> <tr> <td>二段目</td> <td>道行</td> <td>竹本紋太夫</td> </tr> <tr> <td>中</td> <td>竹本袖太夫</td> <td>竹本紋太夫</td> </tr> <tr> <td>切</td> <td>竹本島太夫</td> <td>竹本島太夫</td> </tr> <tr> <td>三段目</td> <td>切口</td> <td>竹本百合太夫</td> </tr> <tr> <td>切</td> <td>竹本此太夫</td> <td>竹本此太夫</td> </tr> <tr> <td>四段目</td> <td>切口</td> <td>竹本政太夫</td> </tr> <tr> <td>切</td> <td>竹本錦太夫</td> <td>竹本錦太夫</td> </tr> <tr> <td>切</td> <td>竹本島太夫</td> <td>竹本島太夫</td> </tr> </table>		初段	大序	竹本此太夫	中	竹本百合太夫	竹本此太夫	切	竹本錦太夫	竹本錦太夫	二段目	道行	竹本紋太夫	中	竹本袖太夫	竹本紋太夫	切	竹本島太夫	竹本島太夫	三段目	切口	竹本百合太夫	切	竹本此太夫	竹本此太夫	四段目	切口	竹本政太夫	切	竹本錦太夫	竹本錦太夫	切	竹本島太夫	竹本島太夫
初段	大序	竹本此太夫																																
中	竹本百合太夫	竹本此太夫																																
切	竹本錦太夫	竹本錦太夫																																
二段目	道行	竹本紋太夫																																
中	竹本袖太夫	竹本紋太夫																																
切	竹本島太夫	竹本島太夫																																
三段目	切口	竹本百合太夫																																
切	竹本此太夫	竹本此太夫																																
四段目	切口	竹本政太夫																																
切	竹本錦太夫	竹本錦太夫																																
切	竹本島太夫	竹本島太夫																																



○江戸大火、操座悉皆焼失して再興せず。大坂より陸續として入り来り、義太夫盛んに行はる。

四

二月十三日稱重紅梅服

豊竹座  
作者 淺田一鳥

二月廿一日鎮西八郎射往來

但見彌四郎  
陸竹小和泉座  
作者 春草堂

春宮古路豊後様の門人、加賀太夫市村座へ出づ。富松薩摩様と改名す。

三月廿二日万戸將軍唐土日記

淺田一鳥  
作者 但見彌四郎  
梁塵軒

七月十五日悪源太平治合戦

並木周藏  
作者 安田蛙桂  
淺田一鳥  
竹本座

八月廿三日傾城枕軍談

五段目

合け  
竹本紋太夫  
竹本其太夫  
竹本袖太夫

人形

吉田文三郎  
桐竹助三郎  
桐竹門三郎  
山本伊平次等

三味線

鷗澤友二郎  
竹澤伊左衛門  
鷗澤本三郎  
鷗澤平五郎

◎四年春

中村座  
宮古路文字太夫  
桃櫻重井筒  
宮古路志要太夫  
同 小文字太夫

◎延享四年二月江戸の肥前座菅原傳授手習鑑興行。大當

◎四年三月 江戸の中村市村の兩座菅原傳授興行。大入大當

寛延元  
(三四〇八)

十二月十六日義經千本櫻

並木千柳  
作者 三好松洛  
竹田出雲  
竹本座  
作者 三好松洛  
並木千柳

正月二日昔歌舞伎の男踊り今操りの女だて容鏡出入の淡

豊竹座  
並木丈輔  
豊岡珍平  
作者 安田蛙桂  
淺田一鳥

四月 陸竹小和泉太夫歿。三十八歳

陸奥茂太夫(竹本筑後様の門人)の弟子。延享三年より道頓堀にて興行す。多くは春草堂の作なり。

七月十五日東鑑御狩卷

豊竹座  
並木丈助

◎延享五年七月廿四日寛延と改元す。  
○容鏡出入の淡は、歌舞伎狂言の出入淡をまねたるなり。出入の淡は、享保十八年江戸の中村座にて興行。

◎寛延元年三月江戸の中村座  
義經千本櫻 興行



八月十四日假名手本忠臣藏	浅田 一鳥 竹本座	初段 二册目	竹本此太夫 竹本百合太夫
竹田 出雲 作者 三好 松洛	竹田 出雲	三册目	竹本信濃太夫
並木 千柳	並木 千柳	四册目	竹本錦太夫
九月三日都期詠住吉誕生石 東管絃 京都竹茂郡大隅座	作者 松井 星照	五册目	竹本政太夫
十月 豊竹越前少様現に於て、一世一代を勤む。	豊竹座	六册目	竹本百合太夫
十一月十四日攝州渡邊橋供養	豊 丈助 安田 蛙桂	七册目	竹本友太夫
十二月廿二日蘆屋道満大内鑑 二度目竹本座	浅田 一鳥	八册目	竹本島太夫
冬内匠太夫受領して、竹本大隅様と稱す。	豊 丈助 安田 蛙桂	九册目	竹本信濃太夫
三月廿六日八重霞浪花演歌	豊竹座	十册目	竹本此太夫
		十一册目	竹本錦太夫
		人形 三味線	竹本政太夫 竹本友太夫 竹本島太夫

○假名手本忠臣蔵役割

吉田文三郎等十餘人  
鮎澤友二郎等四人

四月十八日粟島講嫁入雛形	作者 豊 正助 浅田 一鳥 竹本座	◎二年春 助六郎家櫻 中村座 江月太夫
竹田 出雲 作者 三好 松洛	竹田 出雲	
並木 千柳	並木 千柳	
七月十五日 前。花和讃新羅源氏 操大師。雀黒羽あやま踊。 切。伊勢音頭	豊竹座	
七月廿四日 双蝶々山輪日記	作者 深 塵 軒 竹本座	
竹田 出雲	竹田 出雲	
作者 三好 松洛	作者 三好 松洛	
並木 千柳	並木 千柳	
九月廿三日豊竹此太夫受領して、筑前少様藤原爲政と稱す。此太夫の第一世なり。陸奥茂太夫の門より出つ。享保十八年始めて出座。	作者 近松門左衛門 肥前座	
十月八日蓮記見硯		

◎二年三月 江戸の市村中村森田の三座  
假名手本忠臣蔵 興行



並木宗輔添削

十月 常盤津小文字太夫受領して、宮本豊前

椽藤原敬親と云ふ。

十一月四日十帖 源氏物真太郎

豊竹座

浅田 一鳥

安田 蛙桂

豊 丈助

豊 正助

難波 三藏

十一月廿八日待賢侍從 優美藏人源平布引瀧

竹本座

並木 千柳

三好 松洛

○夏 鶴澤友二郎歿。

六月初日梅川新七夏 櫻連理枕

豊竹座

浅田 一鳥

安田 蛙桂

豊 正助

○明和五年夏中村座物真太郎を興行すこれより先に興行せられたるが如し。

◎三年遠越三治市村座の立作者となる。

三

難波 三藏

竹本座

肥前座

並木 貞輔

作者 一 二 三 軒

八 洲 堂

三 樂 坊

豊竹座

八月七日和田合戦女舞鶴 二度目

九月七日並木宗輔歿。五十七歳 (忌)

千柳と號し、舍柳ともいふ。始め田中

千柳といへり。大坂の人、通稱松屋宗

助、又市中巷ともいへり。

竹本座

作者 並木 千柳

三好 松洛

同日 辰松八郎兵衛(初代)歿。六十六歳 (忌)

人形つかひの名人。始名藤井伊十郎。



寶曆元  
(二四三)

正月十五日 玉藻前職 袂

豊竹座

浪岡 橘平

作者 浅田 一鳥

安田 蛙桂

竹本座

二月朔日 戀女房染分手綱  
(丹波興作の増補)

作者 吉田 冠子  
三好 松洛

五、目道成寺の所作、シテ吉田文三郎、  
ツキ吉田甚五郎、太鼓桐竹助三郎、吉  
田才二、笛吉田彦三郎、小鼓桐竹門三  
郎。

四月廿五日 浪花文章夕霧塚

豊竹座

浪岡 橘平

作者 浅田 一鳥

安田 蛙桂

七月十五日 頼政扇子芝 二段目

八月朔日 頼の關守 八幡太郎東海視

肥前座

作者 一二三軒

○寛延四年十月廿八日寶曆と改元す。

○元年秋中村座戀女房染分手綱を興行す。

十月十日 蓮上人御法海

豊竹座

作者 並木 鯨兒

並木 正三

添削 浅田 一鳥

並木 宗輔

十月十七日 役行者大峯櫻

竹本座

竹田 外記

作者 近松 半二

竹田 文四

竹本大隅様、大和椽藤原宗貫と改名す。初  
代の内匠太夫なり、享保八年始めて出  
座。

十二月十二日 一谷嫩軍記

豊竹座

並木宗輔(三段目迄)

浅田 一鳥

作者 浪岡 鯨兒

並木 正三

難波 三藏

豊竹 甚六

◎元年秋

藤戸日記 桑田座 大薩摩主膳大夫

○一谷嫩軍記役割

初段 大序 豊竹筑前少掾  
中 豊竹信濃大夫  
切 豊竹鐘大夫

二段目 口 豊竹時大夫  
中 豊竹若大夫  
切 豊竹友大夫  
豊竹駒大夫



二

三月廿三日名筆傾城鑑

竹本座

吉田 冠子

作者 中村 閨助

三好 松洛

五月十八日世話言漢老軍談

竹本座

竹田 外記

作者 三好 松洛

近松 半二

中色 閨助

吉田 冠子

七月十六日敵討襍履錦 二度目

竹本座

肥前座

作者 安田 蛙文

野澤 雁使

竹田 外記

十一月十六日伊達錦五十四郡

三好 松洛

三段目

口 豐竹阿曾大夫

中 豐竹友大夫

切 豐竹鏡太夫

進行 豐竹鏡太夫

口 豐竹信濃大夫

中 豐竹胸太夫

切 豐竹阿曾大夫

豐竹若太夫

豐竹時太夫

五段目

○明和六年春市村座一谷を演ず。

○二年秋中村座、諸橋奥州騷興行の時、富本豊前大夫淨瑠璃を語る。春にも、おはな半七の道行を語りて、大賞をされり。

三

十二月七日倭假名在原系圖

豊竹座

浅田 一鳥

作者 浪岡 鯨兒

並木 素柳

豊竹 甚六

春、竹本座京都に於て、操芝居興行多くは大坂の古淨瑠璃なり。

五月五日愛護若名歌、勝間

竹本座

竹田 外記

作者 吉田 冠子

中色 閨助

近松 半二

三好 松洛

豊竹座

浅田 一鳥

七月廿八日雄結勘助島

○寶曆十年秋中村座倭假名在原系圖興行。

◎正月中村座、男遊初賀會我興行の時、千歳十二段の淨瑠璃を舞臺にて語り、慶子は半若丸の人形を持ち、盛府は淨瑠璃姫の人形を持ち云々、(戯場年表)



四

十月朔日菊菴桑門築紫鞆

二度目

豐竹座

作者

浪岡 鯨兒  
並木 素柳  
豐竹 甚六

二月三日葛蒲前操 弦

竹本座

作者

竹田 出雲  
三好 松洛  
吉田 冠子  
中邑 閨助  
近松 半二

二月廿一日相馬太郎 季文談

豐竹座

並木 永輔

作者

浪田 一島  
浪岡 盤藏  
並木 素柳  
豐竹 千蘇

四月十七日小袖組 貫練門平

竹本座

竹田 出雲

七月十六日新海雪物語 二度目

竹本座

前。義經腰越狀

七月廿九日 (南蠻鐵後藤目貫の増補改作)

切。釜淵双級巴

二度目 豐竹座

十月三日小野道風青柳 祝

竹本座

作者

吉田 冠子  
中邑 閨助  
近松 半二  
三好 松洛

十二月十五日天智天皇菟穂鹿

豐竹座

並木 永輔

浪田 一島

浪岡 盤藏主

○寶曆八年秋中村座小野道風青柳祝興行。



五

四月廿一日三國小女郎曙櫻

豐竹上野

作者

難波三藏  
豐竹上野

七月七日双扇長柄松

豐竹上野

並木永輔

淺田一鳥

作者

難波三藏  
三津飲子

浪岡黑藏主

豐竹上野

七月十六日 前。相模入道千匹犬  
切。庭涼 攝座敷

二度目 竹本座

(上七物)

十一月朔日後三年奥州軍記

二度目 豐竹座

十一月十六日 前。柏子扇淨瑠璃合  
後。年忘座鋪 攝

竹本座

(上七物)

◎五年春市村座盛愛護會我興行の時、江戸  
中大夫深翠淨瑠璃を贈る。

六

二月朔日崇徳院讃岐傳記

竹本座

竹田出雲

作者

吉田冠子  
中色圓助

近松半二

三好松洛

三月十八日義仲勳功記

豐竹座

淺田一鳥

黒藏主

作者

七才子

難波三藏

豐竹應律

六月朔日鬼一法眼三略卷

二度目 竹本座

八月二日男作五雁金

二度目 同

十月十五日平惟茂凱陣紅葉

竹本座

竹田出雲

吉田冠子

作者

近松景鯉

◎六年中村座に於て、

鈴 齋宮 大夫  
鈴 齋宮 大夫  
鈴 齋宮 大夫  
大和 大夫



近松 半二  
中邑 閏助  
三好 松洛

十月廿一日千前軒竹田出雲様清定歿。六十六歳

初代出雲の次男。寶永二年竹本座の座本となりてより人形衣裳道具建等を美にして、よく近松の作を活動せしむ。享保八年より作者を兼ね、其作せるも三四十番ありて、佳作甚多し。

閏十一月朔日甲斐源氏櫻軍配

豊竹座  
淺田 一鳥  
黒藏 主  
作者 三津 飲子  
難波 三藏  
豊竹 應律

七

正月五日豊竹肥前様藤原清正歿。五十四歳  
大坂の人なり。越前少様に學ひて道頓堀の座を勤む。享保十九年江戸に下り、

若松丹後様の名代にて興行す。元文年中堺町に於て、新に芝居を起し、肥前座と稱す。三都古來名人多しといへども、芝居の主と、座本と、太夫と、を兼ねしものは、宇治加賀様、豊竹越前少様、及び肥前様ののみなりといふ。

正月廿六日寫齋足利染

豊竹座  
淺田 一鳥  
黒藏 主  
作者 三津 飲子  
難波 三藏  
豊竹 應律  
竹本座  
吉田 冠子  
近松 景鯉  
作者 竹田 小出雲  
近松 半二  
三好 松洛

二月朔日姫小松子の日遊

○安永三年市村座姫小松興行。

◎寶曆七年春、江戸の森田座に於て、淨瑠璃布引、一谷、鬼一、在原系圖、物吳、風島、三段目四段目盡み興行す。







作者 竹土丸

北窓 後一

三好 松洛

五月五日菅原傳授手習鑑 二度目 竹本座

此頃竹本座一月程會棋崎にて興行し、

七月十五日道頓堀へ歸る。

八月朔日聖徳太子職入鑑

肥前座

並木 正三

作者 文 鐘 研

吉川 盛紅

八月十九日 蛭小島武勇問答

竹本座

竹田小出雲

吉田 冠子

作者 近松 半二

三好 松洛

竹田 瀧彦

九

正月 宇賀道者源氏鑑 (讀本淨瑠璃)

作者 福松 陶芋

◎八年秋、常盤津文字太夫、全志要太夫、  
遊酒太夫等、市村座に淨瑠璃を歸る。

◎正 鐘 研 市村座  
常盤津文字太夫

二月朔日高川入相花王

竹本座

竹田小出雲

近松 半二

作者 北窓 後一

竹本三郎兵衛

二 步 堂

二月十七日岩本乾什歿。八十歳

有名の俳諧師なり一代河東と交り厚く  
繪蓬萊いの宇扇浮む瀬禿萬歳幾登勢花  
かたみ水調子有馬筆等河東節の文句は  
此人の手に成れるもの多し満足軒千歳  
兒竹婦人等の號あり。

三月三日 翠源氏齋塚

豊竹座

淺田 一鳥

黒 藏 主

作者 七 才 子

中村 阿契

豊竹 應律

◎九年

◎九 鐘 研 市村座  
常盤津文字太夫  
中村座  
江戸半太夫



五月十四日難波丸金鶏

豊竹座

若竹 笛躬

作者 豊竹 應律

中村 阿契

七月 木曾冠者旭系圖(讀本淨瑠璃)

吐 鳳 軒

作者 濫合 吟考

閑 鷗 堂

九月十六日太平記菊水の巻

竹本座

作者 三好 松洛

近松 半二

北窓 後一

竹本三郎兵衛

豊竹座

淺田 一鳥

作者 黒 蔵 主

豊竹 應律

十二月七日先陣浮洲巖

○明和三年秋中村座太平記菊水の巻興行。

一〇

冬豊竹筑前椽堺へ行く。

中村 阿契

三月十一日櫻姫賤姫櫻

豊竹座

若竹 笛躬

作者 豊竹 應律

中村 阿契

五月六日平假名盛衰記

三度目 竹本座

七月廿一日極彩色娘扇

同

二 步 堂

近松 半二

作者 北窓 後一

竹本三郎兵衛

三好 松洛

八月十五日攝津國長柄人柱

二度目 豊竹座

十一月廿八日忘座敷操

二度目 竹本座

(古淨瑠璃寄せ物)

十二月十二日祇園女御九重錦

豊竹座

作者 若竹 笛躬

◎十年正月廿日津打治兵衛役。七十八歳大坂役者。津山治兵衛の子なり。俳名を英子といふ。江戸作者中興開山と稱せらる。時代物に世話物を取合する作風は此人に始まる。作者たること五十七年の長きに及べり。



一一

正月廿日安倍晴明倭言葉

中村阿契

竹本座

二 步 堂

近松 半二

作者 北窓 後一

竹本三郎兵衛

三好 松洛

三月十一日八重霞浪花夜萩 二度目 豊竹座

四月十九日祇園女御九重錦 二度目 同

五月十八日おはつ曾根崎模様 同

若竹 笛躬

浅田 一鳥

作者 福松 陶半

黒 藏 主

中村 阿契

九月竹本座堺へ行き平假名盛衰記を興行す。

九月十日人丸萬歳

豊竹 應律

◎十一年春、江戸太夫及び文字太夫市村座に淨瑠璃を語る。

十月廿一日冬籠難波梅

作者 未詳

竹本座

人形顔見世夜芝居十日の間勤む。此時吉田三郎兵衛(文三郎の子なり、始め文吾といふ、祖父の名を襲けるなり)文三郎と改名し、江戸へ行く暇乞の爲め出遣ひ。

十一月廿一日古戰場鐘懸松

竹本座

二 步 軒

近松 半二

作者 北窓 後一

竹本三郎兵衛

三好 松洛



○竹本伊勢太夫、江戸葎屋町辰松座の跡取立、座元となりて興行す。

正月九日、竹田からくり座類焼す。竹本座に加はり上るり操竹田からくり狂言打込にて興行す。

二月廿四日三好長慶礎軍談 豊竹座

三月廿一日花系國都鑑 作者 梁 座 軒 竹本座

二 步 堂 近松 半二 作者 北窓 後一

竹本三郎兵衛 三好 松洛 豊竹座

若竹 笛躬 福松 藤助

四月十八日岸姫松巻鑑

◎十二年春、中村座會我蟲負二本櫻興行の時、常盤津文字太夫の淨瑠璃大當り。

◎十二年二月江戸の肥前座古戦場掛松興行、其の四段目に廻道具を始む。(大坂には以前より使へり)大評判。

◎五月 市村座、肥前座にまゐりて廻道具を始む。翌年、中村森田の兩座又之れを始む。

◎十二年、宮本豊前太夫中村座に淨瑠璃を語る。

浅田 一鳥 黒藏 主 並木 永輔 竹本座

七月二日戀女房染分手綱 二度目 竹本座

九月十日奥州安達原 作者 竹田 和泉 近松 半二 北窓 後一 竹本三郎兵衛

正月四日藤原秀郷倭系圖 二度目 豊竹座

正月十八日假名手本忠臣藏 二度目 竹本座

三月六日洛陽瓢念佛 作者 梁 座 軒 宮園豊前座 未 詳

三月今昔妹背の腹帯 作者 未 詳

四月九日新舞臺三拾石艦始 (古淨瑠璃寄せ物) 豊竹座 竹本座

○寶曆十三年春森田座奥州安達原興行。

◎十三年 大薩摩主勝太夫、中村座に於て淨瑠璃を語る。



四月十四日天竺德兵衛郷鏡  
作者 近松 半二  
竹本座

夏秋豊竹座南都へ行く。  
作者 近松 半二  
竹本三郎兵衛

八月三日 前、諸葛孔明鼎軍談  
切。御前懸り淨瑠璃相撲  
作者 竹本座

竹本大和様一世一代を勤む

九月十八日竹本座堺へ行く。

十二月八日番場、忠太紅梅籠  
作者 豊竹座

若竹 笛躬  
中村 阿契

十二月九日御所櫻堀川夜討 二度目 竹本座

○小倉小四郎、江戸外記座の座元となり、大  
西東藏後見をなし、堺町に於て興行す。

團八節

宮古路豊後橋の門人、宮古路團八江戸に下り、寶曆  
明和の頃團八節と稱して一時三都に行はる。

明和元  
(三四三四)

○竹本座一連、千賀太夫、岬太夫、満太夫、  
和佐太夫、等江戸の外記座に下る。留守中  
京都一座下坂して興行す。

正月二日吉野合戦名香兜  
作者 江戸

吉田 冠子

竹谷 平藏

伊藤 荷門

多田 大吉

正月三日須磨内裏 務弓勢

作者 北の新地芝居

正月十七日傾城阿古屋の松

作者 寺田 兵藏

近松 半二

竹本三郎兵衛

作者 豊竹座

夏豊竹座堺へ行く。

五月廿八日おはな七京羽二重娘氣賀  
作者 黒 藏 主  
竹本座(京)

○寶曆十四年六月十九日明和と改元す。

◎元年

振袖東 街道 市村座  
常盤津文字太夫等

留袖淺間掛 同

綴半 宇佐 市村座  
大薩主膳太夫

積置 筏 品姿 中村座  
富本 大和太夫  
常太夫等



七月十五日金龍羅敵討種物語

作者 近松 半二  
竹本三郎兵衛  
竹本座

八月四日浪花の地染増補女舞劍紅葉

作者 近松 半二  
竹本三郎兵衛  
座元 扇谷豊前様  
作者 未詳

九月十三日豊竹越前少様藤原重泰歿。八十四歳。

大坂の人なり。始め竹本義太夫に學びて竹本采女と稱す。後豊竹若太夫と改め、元祿十五年より大坂道頓堀に於て興行す。享保二年上野様と受領し、十六年再び受領して越前少様重泰といふ。延享二年退隱す。梁塵軒と號し自作の淨瑠璃あり。

十月廿一日娘景清八島日記

豊竹座  
(大佛殿萬代礎の増補)

十月廿二日初代富本豊前様藤原敬親歿。四十九歳。

宮古路文字太夫の門人なり。師と共に姓を改めて、常盤津小文字太夫と稱す。延享元年師と絶ちて富本と稱し、後受領して自ら一派をなして今に傳ふ。

十一月竹本座江戸より歸坂す。

十一月十七日江戸櫻愛敬會我

十一月十五日いろは歌義臣登

二月九日關者待新田系圖

三月十六日死文の陣取敷島操軍記

作者 豊竹 應律

○寛政十年桐屋關者待新田系圖興行。

◎二年

江戸名所都島道 常盤津文字太夫 御酒太夫



並木 齋治

四月廿一日名護屋藩磨太夫歿。

延享年中江戸の外記座へ下る。

五月六日愛護若名歌朗 二度目 竹本座

五月十七日増補富士日記喜蒲刀 竹本座

作者 並木 永輔  
竹田 平七

六月十五日御祭禮棚閣車操

竹本座

七月十日二世竹本政太夫歿。五十六歳

大坂とこばに生る。とこば政太夫これなり。

七月廿五日内助手柄ノ淵

豊竹座

豊竹 應律

作者 三笠 恵吉

並木 齋治

八月三十日豊竹座退轉して歌舞伎芝居に變

す。

九月十二日菊池くきいけ姻いん袖鏡そでかがみ

竹本座

近松 半二

◎二年  
Kawakana 市村座  
物録系 梓 弦 常盤津文字太夫

三

正月十四日本朝廿四孝

竹本座

近松 半二

三好 松洛

作者 竹田 因幡

竹田 小出

竹田 平七

竹本三郎兵衛

四月都鳥東古跡 (讀本淨瑠璃)

作者 南 郷 軒

七月十八日常陸帶とちぎのたもと小夜中山鐘由來

竹本座

○寛政十一年市村座廿四孝興行。



十月十六日 太平記忠臣講釋

近松 半二

作者

三好 松洛

竹田 文吉

竹田 小出

筑田 平七

竹本 三郎兵衛

作者

竹田 伊豆

並木 永輔

竹田 小出

竹田 平七

竹本 三郎兵衛

竹本座

近松 半二

○本年豊竹東治座元となり、豊竹此太夫と共に大坂北堀江市の側に於て興行す。

(北堀江座)

○和泉式部軒塙梅

作者

未詳

江戸肥前座

○昭和四年江戸の市村座太平記忠臣講釋を興行す。

四

正月三日 豊竹座再興。

正月三日 星兜弓勢鑑

豊竹座

並木 永輔

並木 才二

作者

浅田 一鳥

寺田 兵藏

豊竹 應律

二月 豊竹座伊勢へ行く。

四月 八日 豊竹座古淨瑠璃一段つゝ札錢十文の追出芝居となる。

四月 警義十三人次郎 (讀本淨瑠璃)

作者

夏 爐 安

五月 六日 聖徳太子 守屋大臣 四天王寺 稚木櫻

竹本座

近松 半二

三好 松洛

作者

竹田 文吉

竹田 小出

八民 平七



竹本三郎兵衛

六月十二日夏祭浪花鑑 二度目

竹本座

八月四日 花軍壽永春  
關取千兩幟

竹本座

近松 半二

三好 松洛

作者 竹田 文吉

竹田 小出

八民 平七

竹本三郎兵衛

八月假名雜後日菅原 (讀本淨瑠璃)

作者 本島 掬遊

中島 車尋

九月九日咲分赤間關

作者 未詳  
京都竹本座

十月十四日石川五右衛門一代噺

竹本座

作者 並木正三等

十二月十四日泉州小田井茶屋  
備州殿下茶屋三日太平記竹本座

○明和六年江戸の森田座關取千兩幟を興行す。

五

二月十五日正保  
四年粧水絹川堤

作者 幾竹島吉野

東 勇助

六月朔日傾城阿波の鳴戸

竹本座

名代 近松門左衛門

近松 半二

八民 平七

作者 寺田 兵藏

竹田 文吉

竹本三郎兵衛

七月朔日きふのむつ  
けふの徳兵衛讀賣三巴

作者 竹本座

近松門左衛門

◎明和五年春櫻田治助市村座の立作者となり六年十一月中村座へ歸す。



九月十四日初櫓操目錄	作者 未詳	竹本座
九月秋津島關取二代勝負附 連官三番叟	並木正吉座 龜谷芝居	八民 平七 並木 互文 並木 宗子 並木 正三
九月廿二日忠孝大磯通	北堀江座	作者 菅 專助
十月十四日東口嶺傾城浪花をだ巻	幾竹島吉座	作者 田中 後調
十一月十九日小いな廓色上	竹本座	作者 杉田 矢直

○安永四年中村座二代勝負附を興行す。

六

正月廿七日振袖天神記	竹本座	作者 近松 半二
十二月廿一日助六紙子仕立兩面鑑	北堀江座	作者 菅 專助
二月十二日裙重浪花八文字	竹本座	作者 近松 東南 松田 才二 三好 松洛
二月廿四日四天王寺伶人櫻	北堀江座	作者 八民 平七
三月十六日蝦夷錦振袖雛形	肥前座	作者 中邑 阿契
七月十二日北濱名物黒船斷	北堀江座	作者 玉 泉堂 吉田 二一 吉田 冠子
		作者 菅 專助

◎六年

紅葉露錦釣夜替 中村座  
常盤津文字大夫



七月十九日時代世話女節用

肥前座

玉泉堂

作者 吉田 二一

吉田 冠子

七月廿八日小いな半兵衛雙紋 笹集筋

北堀江座

菅 專助

作者 菅 專助

中邑 阿契

同 日小 治兵衛 中元 嚼掛筋

竹本綱太夫座

作者 三好 松洛

竹本 嘉藏

八月朔日殿造千丈の縁

竹本豐竹合併

作者 豐竹 應律

黒藏 主

十二月九日近江源氏先陣筋

竹本座

近松 半二

八民 平七

松田 才二

作者 三好 松洛

○寛政五年近江源氏先陣筋を江月の市村座にて興行す。

七

正月十五日義経腰越状 二度目

北堀江座

作者 千路莊主人

正月十六日神靈矢口ノ渡

江月外記座

作者 福内 鬼外

吉田 冠子

補助 玉泉堂

吉田 二一

四月十九日往古模倣龜山染

肥前座

三冬庵自在

吉川 晴虹

作者 森竹 今日志

玉泉堂

○おちよ初物八百屋獻立  
○半兵衛

竹本綱太夫座

同

竹田 新松  
近松 東南  
竹本三郎兵衛

○寛政二年秋市村座腰越状興行。

○寛政六年桐座矢口ノ渡興行。



五月廿二日近江太平頭蓋飾

作者 未詳 竹本座

閏六月廿二日夏衣裳 雁染

作者 寺田兵藏 竹本春吉座

八月朔日傾城扇富士 (増補會琴山) 外記座

故竹田千前軒 作者 玉泉堂

八月十一日小田館双子日記

座元 京 都 扇谷和歌太夫

八月十二日源利生の池水

作者 菅專助 竹本春吉座

八月十六日源氏大草紙

作者 八良平七 寺田兵藏

八月十六日源氏大草紙 (國の名は長門萩大名傾城敵討)

作者 近松半二 近松東南 三好松洛

八月十九日源氏大草紙

松田才二 竹本三郎兵衛 肥前座 作者 福田鬼外

九月十九日源平鶴鳥越

座元 豐竹此吉 豐竹万三

菅專助 作者 中邑阿契

八民平七 豐竹應律

十月三日通矢數四十七本

作者 未詳 竹本座

十一月十四日松久山由緒十徳

作者 未詳 竹本座

十二月十五日源氏大草紙 魁鐘叩

作者 菅專助 若竹笛躬



八

豊 青 洲

正月廿日弓勢智勇湊

江戸肥前座

作者 福内 鬼外

補助 吉田 仲治

正月廿三日朝鮮九州與次兵衛灘

豊竹座

作者 竹本三郎兵衛

中邑 阿契

正月廿八日十三鐘妹脊山婦女庭訓

竹本座

作者 松田 ばく

近松 半二

榮 善 平

後見

三好 松 洛

三月 源氏の弓流 船軍凱陣兜 (讀本淨瑠璃)

作者 葉 水

李 卿

五月廿三日梅之助額嫉妬蛇柳

豊竹座

作者 竹本三郎兵衛

◎八年

復花郭 劇團 中村座 常盤津文字太夫

市村座

紅葉狩々 丹前 豊名賀志妻太夫 高本豊志太夫

○安永七年二月十五日森田座妹脊山婦女庭訓興行。

七月七日關取一鳥居

肥前座

作者 玉 泉 堂

吉田 仲二

八月十日汐標浪花筏

北堀江座

作者 梁 塵 軒

若竹 笛 躬

中邑 阿契

八月十四日梅野迎駕籠死期茜染

豊竹座

作者 竹本三郎兵衛

寺田 兵 藏

十一月十五日四代目河東歿。

北堀江座

作者 北脇 素人

梁 塵 軒

中村 阿契

十二月廿八日嗚呼忠臣楠氏旗

豊竹座

作者 竹本三郎兵衛

若竹 伊 輔



十二月廿九日 存主は東山殿櫻御殿五十三聯

竹本座

八民平七

近松半二

作者 榮善平

寺田兵藏

松田ばく

後見 三好松洛

○本年四月より、大坂におかけ参り流行す。操に取組みて出語り出遣ひをなすもの次の如し。

五月 艶祝詞太々神樂

七月 色爲替曲輪之通

八月十一日 古今三朝迎三途雲

何れも竹本座の興行にして正本出でず。

安永元

(三四三三)

正月雷太郎君代言業

竹本座

作者 未詳

○明和九年十一月十六日安永に改元す。

四月七日忠臣後日咄

北堀江座

北脇素全

作者 中村阿契

豊芦洲

若竹笛躬

四月廿八日 しつげん 膳方武士鑑

竹本座

近松半二

松田ばく

作者 寺田兵藏

榮善平

竹本三郎兵衛

八月朔日 あへり 見取淨瑠璃

竹本座

作者 未詳

八月十九日千種結齋畫草紙

北堀江座

北脇素人

作者 中村阿契

若竹笛躬

十二月十四日後太平記瓢箪録

北堀江座



	<p>十二月廿六日<small>豊屋半七</small>艶容女舞衣 豊竹座        作者 若竹 笛助</p> <p>竹本三郎兵衛        作者 豊竹 應律        八民 平七</p>
<p>二</p>	<p>正月九日刀屋半七<small>豊初花</small>        達模様愛敬曾我        (正本不出) 竹本座</p> <p>二月五日<small>播州合邦辻</small>        作者 菅 專助        若竹 笛助</p> <p>二月十七日並木正三<small>歿。五十二歳</small>        大坂の人。俗稱高砂屋平左衛門。並木宗輔の門人なり。歌舞伎狂言作者にして、側ら淨瑠璃の作をなす。霧太郎天狗酒齋、傾城天羽衣、日本一和布刈神事、三拾石燈始、等は狂言の中有名なものなり。殊に宿無圍七時雨傘は最も世に鳴る。</p>

	<p>閏三月十五日志のた妻今物語 豊竹座        (正本不出)</p> <p>四月六日伊達娘戀<small>緋鹿子</small> 北堀江座        菅 專助</p> <p>四月三十日嫩葉相生源氏 雁前座        作者 福内 鬼外</p> <p>七月廿八日時代時繪<small>いろは藏三組盃</small> 北堀江座        作者 近松 半二</p> <p>七月南無三寶極樂往來遺奇初 北堀江座        (正本不出)</p> <p>八月廿一日小田角髪<small>羽柴産髪</small> 島原千疊敷 竹本座        (正本不出)</p> <p>八月廿七日呼子鳥小栗實記 北堀江座</p>



<b>三</b>	
<p>十一月五日三十二相刀双競 作者 菅 專助 若竹 笛躬 竹本座 (正本不出)</p> <p>十一月廿二日 釜淵双級巴 櫻鑿恨殿鞘 作者 未詳 豊竹座</p> <p>正月十二日前太平記古跡鑑 作者 座本吉田真蔵 福内 鬼外</p> <p>四月六日性根競姉川頭巾 作者 竹本座 近松 半二</p> <p>作者 榮 善平 八民 平七</p> <p>八月十一日鶴賀加賀太夫新内殿。 本姓岡田五郎治郎。湯方御家人なり。 富士松薩摩の門人。</p> <p>九月三日鑄鉄六一代断 作者 肥前座 吉田 仲二</p>	<p>◎恨殿鞘は、大坂心齋橋結屋喜兵衛板の番附には明和四年とあれど、外題年鑑に従ひてこゝに掲ぐ。</p> <p>◎二年十一月中村座御振動進帳(櫻田治助作を興行す。)</p> <p>新内節 江戸 鶴賀新内のはしむる處世に行はれて今に至る。</p>

<b>四</b>	
<p>十一月六日役者評判身振操 松 貫四 竹本座 (古淨瑠璃寄せ物) 豊竹座 (正本不出)</p> <p>十二月廿六日物躰北男鑑 作者 江戸 松 貫四 吉田 仲二 江戸外記座 千品 龜井 北堀江座</p> <p>正月廿九日軍術出口柳 作者 菅 專助 安田 阿契 若竹 十九 若竹 笛躬 竹本座</p> <p>二月廿三日東海道七里ノ船梁 作者 近松 半二 榮 善平</p>	



八民平七

四月五日 競伊勢物語 中ノ芝居座元 風松治郎

五月廿八日 初冠賤束帯 座元 吉田 専蔵

(増補河内通) 作者 奥野 榮治

七月十五日 忠臣いろは實記 江戸 作者 福内 鬼外

八月十二日 増補競伊勢物語 京都豊竹島大夫座 作者 遊泥居(奈河龜助)

九月八日 倭歌月見松 北堀江座 菅 専助

作者 安田 阿契

若竹 笛躬

九月廿五日 戀娘昔八丈 外記座 松 貫四

作者 吉田 角丸

正月二日 櫻姫操大全 尾前座 松 貫四

○競伊勢物語は、歌舞伎より入りたるものにて、ハテクラベミミたる例もあり、或はダテクラベミクラベミと訓みたり古老より聞けり、古番附によりてハナクラベミと訓せり。

○戀娘昔八丈は、白子屋お熊の事蹟を任組みたるなり。享保十一年十一月七日の事にして、十二年二月廿五日、お熊は引越の上死限。五年二月初日より中村座戀娘昔八丈興行。

五

作者 友三郎

正月廿一日 鯛屋貞柳歳旦鬧 鬼 眼 北堀江座

菅 専助

作者 若竹 笛躬

安田 阿契

近松 半二

二月廿三日 昔八丈色揚瀬川染 外記座 松 貫四

作者 吉田 貫丸

三月十三日 五代目河東夜。初名沙洲。本郷春木町薪屋平四郎。

北堀江座

四月三日 三國無双奴請狀 近松 東南

作者 安田 阿契

若竹 笛躬

八月 河井正宗刀山來志賀の敵討 外記座 作者 紀上 太郎

芭蕉翁俳句濫觴







四月廿一日心中紙屋治兵衛 作者 竹木座	菅 專助 豐竹 應律 豐 慶三 若竹 笛躬
四月佐々木高綱武勇日記 (外。には二月初日) 作者未詳正本不出	近松 半二 竹田 文吉
七月十七日道中龜山斷 作者 竹木座	江 群堂 豐竹 應律 豐 滄水 若竹 笛躬
八月十六日以呂波讃州屏風浦 行狀記 作者 北堀江座	近松 半二
九月廿三日徳兵衛往古曾根崎村 作者 近松 半二	

◎七年二月十八日城越二三治説。五十八歳初代澤村宗十郎の門人なり。姓を澤村といへり。寛延三年、市村座の立作者となりて城越を改む。常盤津文字太夫が淨瑠璃に當り作多く、一狂言の内一幕づゝ淨瑠璃を加ふるこゝ此人に創る。

八

十一月妹脊結町家仙人 北堀江座	近松 善平
十二月廿一日夏浴衣清十郎染 作者 菅 專助 豐 春助	(操の顔見世) 北堀江座
二月八日後日荒御靈新田神徳 作者 結城座	福内 鬼外
三月廿一日伊達競阿國戯場 作者 森羅萬象 二一天作	肥前座
七月六日大山納太刀譽鑑 作者 達田 辨二 吉田 鬼眼	外肥座
七月七日騾山比翼塚 作者 紀上 太郎 平原屋東作 松 貫四 肥前座	

○これより先、安永六年八月市村座、伊達競阿國戯場を興行す。櫻田治助の作なり。







天明元  
(三四四八)

三月三日 靈驗宮戸川  
作者 豐 春助  
竹本三郎兵衛  
豐竹 應律  
江戸

四月 善光寺御堂供養  
作者 福内 鬼外  
京都

九月廿三日 稻荷街道墨染櫻  
作者 未詳 太夫山本春太夫  
北畑江座

九月廿三日 合詞四十七文字  
作者 菅 專助  
豐竹 春助  
豐竹 應律  
堀江此太夫座  
(種々のよせ物)  
竹本座

九月廿八日 新板歌祭文  
作者 近松 半二

正月二日 むかし唄今物語  
作者 肥前座  
大原 和水  
双木 千竹

◎元年四月廿五日より市村座に於て  
道行比翼の菊蝶 初日  
道行垣根の結綿 二日目  
道行瀬川の仇涙 三日目  
全 齋宮太夫  
大 富本 豊前太夫  
全 安和太夫

◎二年春  
助六所縁江戸櫻 市村座  
江戸太夫河東

一一

二月朔日 初代常盤津文字太夫歿。  
京都寺町の人、俗稱駿河屋文右衛門、  
宮古路豊後椽の門人なり。元文の始め  
江戸に下る。始め宮古路文字太夫と稱  
し、後關東文字太夫と改め、後又常盤  
津と改む。

二月廿四日 後太平記時代織室町錦織 竹本座  
十三卷目

七月初半 兵衛 肥前座  
たちよはん長右衛門三日替  
おなつ清十郎

八月花飾三代記(讀本淨瑠璃)出づ 作者未詳  
九月十八日 盤櫻錦合様織留 竹田新松座

正月二日 局岩崎 中老尾上加賀見山 齋 錦繪 外記座  
三月替唱歌糸の時雨 作者 容 揚 黛  
竹本座

作者 入我園我入  
長谷川夏秋

◎元年秋市村座に於て  
と 連理橋 太夫 不明